

## 科学論・科学技術社会論の視点を「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」に適用する——小西甚一を援用し、見えてくる文化受容の「漢文方式」から「資格（英語・博士号）方式」への転換 その一

草 薙 太 郎

本稿は全体として以下の構成を持つ論文シリーズの一部である。

1. はじめに
  - 1-1 考察の主題と先行研究
  - 1-2 「技術官僚モデル」が当てはまる先行研究
  - 1-3 「技術官僚モデル」と「モード論」の関係を検討して今後の日本の文化受容のあり方を予測する
  - 1-4 「モード論」, 「技術官僚モデル」, 文化の授受方式の図式化
  - 1-5 中国, 韓国に比べ日本が近代化で先んじた理由を図式で説明
  - 1-6 「文学研究」を「科学」にするため「いわゆるいいがたきもの」の排除
  - 1-7 「科学」であろうとする「文学研究」が関連する「倫理」を中心にした様々な観点
    - 1-7-(a) アメリカのミクロ倫理
    - 1-7-(b) 日本のメソ倫理
    - 1-7-(c) 西欧のマクロ倫理
    - 1-7-(d) メタ倫理
    - 1-7-(e) 多文化主義と「テロ対策」が行動主義的政治哲学へ
2. 科学論・科学技術社会論の視点での「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」の分類と考察
  - 2-1 「技術官僚モデル」から「モード論」へ
    - 2-1-(a) 「技術官僚」の教養が「モード論」で崩壊
    - 2-1-(b) 「モード論」で歴史感覚が崩壊
    - 2-1-(c) 文化の数理性, 音楽性追求が「知的財産」問題に
    - 2-1-(d) 西欧文化のマイノリティー迫害告発（多文化主義への底流）
    - 2-1-(e) 多文化主義, 文化的唯物論視点での「シェイクスピア現象」論
    - 2-1-(f) 「調査的面接法」による「シェイクスピア現象」研究
    - 2-1-(g) ホモセクシュアルが照射する「技術官僚モデル」から「モード論」への動き

- 2-2. 「技術官僚モデル」と「モード論」の共通項探究
  - 2-2-(a) アングロサクソニズムについて
  - 2-2-(b) 大陸西欧文化について
  - 2-2-(c) キリスト教について
- 2-3. 科学技術社会論の「シェイクスピア現象」への適用
  - 2-3-(a) 女性学傾向の社会論
  - 2-3-(b) (科学技術) 社会論
  - 2-3-(c) 政治学(法学) 傾向の社会論
- 3. 終わりに

以上のうち以下を本稿に収録してある。

- 1. はじめに
  - 1-1 考察の主題と先行研究
  - 1-2 「技術官僚モデル」が当てはまる先行研究
  - 1-3 「技術官僚モデル」と「モード論」の関係を検討して今後の日本の文化受容のあり方を予測する
  - 1-4 「モード論」, 「技術官僚モデル」, 文化の授受方式の図式化
  - 1-6 「文学研究」を「科学」にするため「いわゆるいいがたきもの」の排除
  - 1-7 「科学」であろうとする「文学研究」が関連する「倫理」を中心にした様々な観点を予測する
    - 1-7-(a) アメリカのミクロ倫理
    - 1-7-(b) 日本のメソ倫理
    - 1-7-(c) 西欧のマクロ倫理
    - 1-7-(d) メタ倫理
    - 1-7-(e) 多文化主義と「テロ対策」が行動主義的政治哲学へ
- 2. 科学論・科学技術社会論の視点での「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」の分類と考察
  - 2-1 「技術官僚モデル」から「モード論」へ
    - 2-1-(a) 「技術官僚」の教養が「モード論」で崩壊

## 1. はじめに

### 1-1 考察の主題と先行研究

シェイクスピアの『オセロ』を論じた米国の学位論文がある。当時実際にてんかんの発作を起こした事例を軸に、ガレノス（全体として経験主義的でも解剖の実証がなく、加持祈祷的治療も容認）とパルケルス（解剖などの知見を取り入れる。中世的加持祈祷は否定）の医学的見地対立が、非国教徒（ピューリタン、カトリック）と国教会の対立、実証的な新科学導入の機運があるベーコンを中心にした政府と、その支配への反発との対立に反映されたとする。またムーアにはイスラム教の響きがあり、アフリカをそのようにとらえる感覚があったとする。オセロをイスラム教徒、イアゴをイエズス会士になぞらえることもする。ジェイコブも援用し、新歴史主義的挿話を主体にした科学技術社会論を含む論考<sup>1</sup>である。

これは内容的に科学史に近く科学技術社会論というより科学的論文かも知れない。これが果たして「文学研究」か、という批判は、特に英国の学会から提起されそうである。「文学研究は科学でありうるか」という問いかけを根底に含んだ科学論・科学技術社会論と文学研究の関係を考えてみたい。

その過程で行き着いた一つの結論としては、文学研究の中には明らかに科学技術社会論として位置づけ出来るものと出来ないものがある。その区別をはっきりすべきだということである。特定のイデオロギー（ナショナリズムを含み国籍へのこだわりも含む）に基づく文学研究は科学技術社会論としての位置づけは出来ない。文学を科学技術と同じ普遍性の下に置こうとする姿勢がイデオロギーによって損なわれるからである。それなら、どこの国にでもある宮廷サロンで花咲いた文学も、権力者との関わりを強調するイデオロギーがあるとして、科学技術社会論としての位置づけは出来ないのだろうか。一方で「技術官僚モデル」という形で、科学術社会論は権力と科学技術との結び付きを検討する。この観点を含め、文学の普遍性を科学技術と同一視することが出来るか、特に、文学研究を科学技術社会論として位置づけするには、どのような要素が必要かを明らかにしたい。

これが本稿を含む論文シリーズ全体の主題である。

この主題を探求した先行研究としては小西甚一の『日本文藝史』(I～V)『日本文学原論』がある。『日本文学原論』で小西は風巻景次郎(1902-60)を紹介し、「文藝を学術の立場から研究するための『文学的事象を社会的現象として見ることが許されなければならぬ』という主張は、当然、それぞれの様式が生産基盤たる社会といかに関わるかを問う。・・・私見では、風巻の立場こそ、日本文藝学の本流となつてよかつた。だが、その主張を実際の業績として示

---

1 Moss, Stephanie, *Reading Epilepsy in Othello*, (1997). MF||198||2 (富山大学図書館請求番号)

せなかった風巻は（わたくし自身もそれが思うように実現できなかったことを棚上げるならば）、かえって本流的な傍流と認められようか。<sup>2</sup>と述べ、これと、以下に述べる小西の「文学を科学と看做そうとする姿勢」とを合わせれば、自己の文学研究が事実上科学技術社会論になっていることを示している。

フライと小西の主題に関する共通点の一例を示せば、「十九世紀文学と二十世紀文学の差異、つまり近代文学と現代文学の差異はニュートンの古典力学と量子力学の不確定性原理の差異だ」と『日本文藝史』の中で小西甚一は述べ<sup>3</sup>、また「批評という形の文学研究は科学の一種で、十九世紀的な純粋な科学、厳密な科学とは違うもの」(What if criticism is a science as well as an art? Not a “pure” or “exact” science, of course, but these phrases belong to a nineteenth-century cosmology which is no longer with us.<sup>4</sup>)とした記述は、主として英文学を資料として、ノースロップ・フライが文学研究のディシプリンを確立しようとして述べたものである。

文学研究を科学の一ディシプリンにしようとしたノースロップ・フライや、心理分析を文学研究に応用したバシュアールなども踏まえ、いわゆる構造主義、脱構築にも目配りし、日本文学を論じてアイヌや沖縄の文学との関係も忘れず、文化人類学的な手法への考察を忘れない（英米の研究者との交流のせいも、小西の研究には多文化主義的な観点とその批判も多々指摘出来る）小西甚一の研究は、この問題について、およそ考え付く限りの先行研究を踏まえている。さらに、『日本文学原論』には、村上陽一郎の研究、朝永振一郎との交流を踏まえ、直接的に科学論・科学技術社会論を考察（村上を引用して）した一節<sup>5</sup>もある。ヴィーン学派やクーンにも触れ（ポパーとの論争も含む）、「日本文学も科学でありたいならば、自然科学における科学史と科学哲学に相当する学績が不可欠なのである。それを欠くならば・・・その実質はT.S.クーンのいう通常科学でしかあるまい<sup>6</sup>」と述べる。方向性として、かなり意識的に小西が科学技術社会論に近い文学研究を目指していたことは確かのように思われる。

『日本文藝史』は、国内でも大佛次郎賞を受賞し、著者は文化功労者に列せられ、執筆がスタンフォード大学の一種の委託業務のような形で行われ、プリンストン大学出版部から英訳が出版されて、一応世界的な水準の研究と看做してもよいのではなかろうか。

さらに冒頭で掲げた論文を含む米国シェイクスピア研究学位論文は、これまで科学研究費補助金、ドル減らし予算などを使って収集した米国シェイクスピア研究学位論文をデータベース

---

2 小西甚一、『日本文学原論』,(2009), p.76.

3 小西甚一、『日本文藝史V』,(1992), p.331.

4 Frye, Northrop, *Anatomy of Criticism*, (1957), p.7.

5 小西甚一、『日本文学原論』,(2009), pp.852-6.

6 *Ibid.*, p.868.

化したものの一部である。これらは、シェイクスピア研究という「文学研究」でありながら、科学論・科学技術社会論を踏まえているものが多く、主題を論ずるというより、有無をいわず「シェイクスピア研究は科学論・科学技術社会論であって不思議はない」と主張する、意識せざる先行研究といえる。冒頭の例はその典型である。

米国シェイクスピア研究学位論文には、多文化主義の立場（アメリカで世界から摂取した様々な比較的マイナーな文化を西欧文化と対等に扱うことを推進する立場）の学習プログラムとシェイクスピアを論じたものがある。ヨーロッパ主義、家父長主義（西欧文化偏重の象徴）が強いとして排斥される傾向に反論し、多くの言語に訳され世界で上演されるシェイクスピアは普遍的であるとする論考<sup>7</sup>である。問題劇やシェイクスピア＝ベーコン説、シェイクスピア＝ヴィア説などを予め断って避け、アメリカでポピュラーなもののみを扱う。その結果「シェイクスピア喜劇には独立して闊達な女性が登場するからフェミニズムの立場にも配慮」といったフェミニズムがまさに嘯み付きそうな表現もある。

先述のように小西が文化人類学的手法も参照しつつ文藝の各民族による発達段階を考慮することは必然的にマイノリティーへの視点を持つことになる。明確に多文化主義を意識していたかどうかはともかく、小西が『日本文藝史』執筆の機会を与えられたスタンフォード大学は、まさに「多文化主義運動」の契機になった<sup>8</sup>ことで有名な大学であった。

フェミニズムを含めマイノリティーへの視線を小西と米国シェイクスピア研究学位論文に見てゆくことは、双方を本主題の先行研究として扱う立場になる。この小西とアメリカの研究風土との親和性を端的に指摘出来るのは『キング』（講談社による大正十四年創刊の大衆文学雑誌で月間百万部以上の驚異的発行部数を示す）研究である。これを『日本文藝史』で問題にし<sup>9</sup>、スタンフォード大学フーバー研究所に全巻が揃っていて、「売れた」（つまり大衆に評価された）からには傑出した特色があるはずとして、それを探求していることを注で小西は紹介する<sup>10</sup>。

これとは対照的に『批評の解剖』は「文学の価値と大衆による評価は無関係」（it is clearly the simple truth that there is no real correlation either way between the merits of art and its public reception<sup>11</sup>）とし、この意味でも文学研究の独立したディシプリンを唱えた。これも一つの立場であるものの、これではアメリカ文学の大半が批評の対象から除外されかねない。この点を含め、フライの主張はもっと大きな構造（いわゆるポスト・コロニアルといわれる批

7 Remillard, Gerard J., *Universality found in William Shakespeare's works*, (2003). CR||291||1

8 古矢旬,『アメリカニズム「普遍国家」のナショナリズム』, (2002), p.183.

9 小西甚一,『日本文藝史V』, (1992), p.653.

10 Ibid.p.660.

11 Frye, Northrop, *Anatomy of Criticism*, (1957), p.4.

評方法を含め、大衆文化への関心を取り込んださらに大きなディシプリン体系)の中で捉えなおす必要があるのではないか。

こうした大衆文化への関心は、最先端の現代の問題に移し替えれば、SF(サイエンス・フィクション)になる。

そのSFが科学技術社会論で最近取り扱われた。「現実離れたSFであるとの批判もあるが、マイケル・クライトンの『プレイ』(Prey)では遺伝子工学とナノテクノロジーおよびソフトウェア技術の融合によって誕生するナノロボットが自己複製の暴走を始め、パニックを引き起こすストーリーが展開されている(クライトン 2003)」<sup>12</sup>という記述がある。

これはたまたま最新の科学研究事例がSFで取り扱われたに過ぎないとの批判については、後述の図式化で応えるとして、時代を超えた大衆文化の本質を見つめようとすることは、小西と米国シェイクスピア研究学位論文と科学技術社会論を結び付ける。

SFについてはひとまず措いて、科学技術社会論の豊富な事例研究もこの主題の先行研究であると看做すことが出来ることを述べたい。行政と市民が対立し交渉するときの「官僚の権威」と「民主主義」に関することで、それが文学研究と結び付き、時代を超えた大衆文化の本質を見つめようとすることも結び付くのである。重要なのは科学や文学の普遍性の名において「権力というイデオロギー」を排除すべきや否やという点である。これについては項目を改めて次に詳述したい。

## 1-2 「技術官僚モデル」が当てはまる先行研究

行政が市民を公害、薬害等から保護しないだけでなく、原子力発電所、巨大ダム建設などを通じて迫害するに近いことをする面が(稀にあるのか、多々あるのかはともかく)指摘される。その際、反対を唱える市民との交渉の席で、いわゆる御用学者と御用学者調達に腕をふるう「技術官僚」が一定の役割を果たすことを考察するのが前項で「科学技術社会論の豊富な事例研究」として述べたことである。科学技術社会論の学術タームを解説した教科書<sup>13</sup>もこうした事例研究を多く紹介し、日本の科学技術社会論学会の機関紙『科学技術社会論研究』も、こうした事例研究に多くのページを割いている。

これらは一面において科学技術社会論の学術タームで「技術官僚モデル」として把握出来る。「技術官僚モデル」は、社会的意思決定の現場で、行政官が専門家の意見に厚い信頼を寄せる。そのため市民の議論を評価する「民主主義モデル」と対立する<sup>14</sup>。これが「文学」が関わる文

---

12 柴田清,「ナノテクノロジー」編集にあたって、『科学技術社会論研究6』,(2008),p.10.

13 藤垣裕子編,『科学技術社会論の技法』,(東京大学出版会,2005).

14 Ibid.,p.261.

化行政に関する場合がある。冷泉家の文化保護継承をめぐる行政との交渉事例である。

役人は議論のテーブルにつくだけで、いわゆる御用学者が意見表明するだけでは文化行政への不信感は当然であり、協力的であった現場の大工、建具師まで、行政組織側の人間になると、その精神が硬直化するという趣旨を述べる<sup>15</sup>のは、日本美術史の研究者で冷泉家の婿養子に入り、冷泉家二十五代当主となって、その文化遺産保護に奔走する冷泉為人の言である。興味深いのは同じ職人（伝統文化保護継承のプロといえる）が、行政側に立つときと、冷泉家側に立つときとで態度を変えることである。この点は後で詳しく論じたい。

冷泉家は周知のように藤原定家の和歌の伝統を継承する名家で、ときどきの行政側の態度に翻弄されながらも、自力で日本文化の中核を守ってきた。終戦直後の混乱期、冷泉家は固定資産税を払うことを行政から強要され、冷泉家側も和歌と無関係な資産を売り払って応じたといった、いわば行政による文化への直接的迫害もあった<sup>16</sup>という。行政の支援を受け、寄付を募り、財団法人化して保護する対象は冷泉家ゆかりの美術工芸品が主であっても、定家の「文学的価値」がなければその意義は失われる。冷泉家が家の文化として保護継承しようとしたものは藤原定家の和歌の伝統であり、日本文学の根幹をなすもの（研究面、創作面を併せ）であった。この点により、「文学研究」と科学技術社会論の事例研究が直接的に結びつく事例と看做してもよいのではなかろうか。

この場合、「民主主義」の意味を巡って問題は複雑化する。

そもそも冷泉家に固定資産税を払うことを強要した行政とは、戦後に民主主義国日本として再生した国家の行政であり、農地改革を始め戦前の地主、財閥、華族追放キャンペーンの一環としてなされた。その恨みもあってか、冷泉為人は、堺屋太一の、文化は多数決では生まれないと、民主主義国家の官僚主導文化保護体制を批判する論を引用する。堺屋は欧米では民間による文化保護が一般的とし、民間から美術館への寄付に免税措置があることを指摘するという<sup>17</sup>。

科学技術社会論の学術ターム「技術官僚モデル」の把握では単純に「官」と「民」の対立になる。ところが、冷泉家の例では民主主義国日本の「官」と、戦後の改革で「官」を追われた「かつて官であった民」との対立という複雑な構造になっている。

そもそも「技術官僚モデル」は、西欧で発達した科学技術を中心に、市民と王侯貴族の対立を想定し、その対立の中で王侯貴族の側に立つ「技術官僚」が科学技術の真理を曲げて市民を迫害する「権力の横暴」を念頭においている。西欧は今でもかつての王侯貴族が様々なものを

---

15 冷泉為人、『冷泉家・蔵番ものがたり』、(2009), p187.

16 Ibid., p.105.

17 Ibid., p242.

隠れ蓑にして権力を維持している面があり、日本も戦後民主主義は徹底せず、官僚にかつて天皇の官僚であった権威主義を引きずる面があるので、このモデルはある程度通用する。

ところが、王侯貴族が存在せず、実際に市民が権力を握ってしまったアメリカの場合には問題は複雑化する。(これはアメリカ型民主主義を戦後輸入し、地主、財閥、華族を解体した日本にも当てはまる一面になる。) マッカーシー旋風からアメリカ建国時まで遡り、知識人がアメリカでは疎外され、知識人ではないことを示さないと権力を持ってない伝統があるという主張を展開したホフスタッターは、その伝統の中で長く社会から疎外された知識人と、社会に順応した知識人の対立を、「疎外と体制順応」という形で捉えられるとする。それは社会を批判し、孤立を愛する知識人と、御用知識人の対立とも言える。つまり「権力にのみ関心をいだき、権力が押しつける条件をそのまま受け入れる技術屋たち、もう一方はみずからの理想を実現させることよりも、自分たちの純粋性を維持することに関心をもつ確信犯的疎外派知識人である」<sup>18</sup>と分析する。疎外派には「責任より自らの純粋さ重視」、御用知識人には「権力を突き放す力を失う」といった風に、そのどちらにも欠陥があるとし、しかしながら「知識人共同体の内部には、権力と批判の両世界のあいだに立つ能力をもった知性が生まれるはずだ」<sup>19</sup>と知識人分裂危機の回避を期待する。

これを冷泉家の問題に適用してみよう。「藤原定家の文学的価値」が、日本文学の根幹をなし、日本文学研究のみならず、外国文学研究、比較文学研究の対象としても絶大なものであることは、誰しもが認める。けれど冷泉家の文化保護継承に絡んで、行政が限られた財政の中でどれだけ予算を組めるかという問題になると、二つの極端な立場が想定出来る。一つは、「藤原定家の文学的価値」を最大限に評価し、冷泉家の文化保護継承には出来る限りの予算を支出すべきとする立場であり、一つは「藤原定家の文学的価値」は絶大でも、それは過去のものとして一定の役割を終えているとし、最低限の文物を保管することはしても、いわゆる冷泉家流歌道の歌人から、特に明治以後さしたる歌人も輩出していないことを指摘し、行政が保護する必要はないとする立場である。

この二つの立場の間で調整を行う議論を展開して交渉を妥結させるのが、いわゆる御用学者の任務であろう。一方「孤高の純粋派研究者」は、文学研究にはあまり経費がかからないことを幸いに、出来るだけ行政が絡む場に出ることを避けることになる。それで文学研究者としての責任が果たせるかどうか疑問を残しつつ、この場合、冷泉家の文化保護継承問題とは無関係になってしまう。

18 Hofstadter, Richard, *Anti-intellectualism in American Life*, (1963), 田村哲夫訳, リチャード・ホフスタッター, 「アメリカの反知性主義」, (みすず書房, 2003), p.377.

19 Ibid., p.377.



そのどちらでもないホーフスタッターがいう「権力と批判の両世界のあいだに立つ能力」とは、冷泉家文化保護継承に行政が支出する金額を、誰もが納得する明確な基準を示して算定提示出来る能力になる。それには権力に迎合するのでも権力と関係を断つのもなく、権力を客観視出来る能力が必要になる。また算定提示には行政側の統治理念との関わりによって様々なケースが予想され、複数回答になる可能性もある。

この項のまとめとして、ひとまずは「技術官僚モデル」が当てはまる先行研究として科学技術社会論の葉害、公害、ダム建設などの事例研究と冷泉家文化保護継承問題という事例研究（当事者の記述ながら冷泉為人の訴えは一つの「研究」と看做せるのではないか）があると指摘しておきたい。

こうして述べてきた権力と権力批判をめぐる複雑な状況に対応するのに、科学技術社会論の「技術官僚モデル」は、「官」と「民」の対立という図式が単純過ぎるのと、常に権力との関係において問題を整理しようとする難点がある。それよりは、同じ科学技術社会論の学術タームとして、権力とやや離れた解析を行う「モード論」が有用であることを次に示したい。

## 1-2 「モード論」の展開という先行研究

まず科学技術社会論でいう「モード論」を説明すると、モード1は大学などで行われる既存の知識生産様式で、蝸壺的専門主義、当該ディシプリンの知識体系への寄与度で業績評価が同僚によって決まる。モード2は分野横断的で問題解決への寄与度が評価される<sup>20</sup>。

「技術官僚モデル」との関連を単純化して示せば、「孤高の純粋派研究者」はモード1に御用学者はモード2化した研究者の傾向を示すことになる。行政が問題解決のために学者を動員するとき、その解決に不満を持つ側が動員された学者を御用学者と呼ぶ。「曲学阿世の徒」という言い方もある。「孤高の純粋派研究者」と「世に迎合する学者」の対立は伝統的なものである。そうした非難応酬の価値判断を保留し、「ディシプリンの知識体系への寄与」か、多くは行政が抱える問題の「問題解決への寄与」かで、対立軸を考えるのが「モード論」である。

応用を考えない理論物理学研究者、数学研究者、行政と関わらない文学研究者の多くはモード1になる。工学研究者の場合、論文を書くのがモード1、特許申請するのがモード2という分け方も出来るし、そもそも工学はすべてモード2で、理学がモード1だという考え方もある。医学は、そもそも病気の治癒が目的ということを強調すればすべてモード2になるものの、臨床研究だけをモード2にして、基礎研究をモード1とすることも出来る。

これを踏まえ、冷泉家問題に適用し「技術官僚モデル」と「モード論」の違いを検討すると、冷泉為人の主張は戦後民主主義の悪い面を修正するということになる。文化保護継承の面で戦

---

20 藤垣裕子編、『科学技術社会論の技法』, (東京大学出版会, 2005), p.272.

前の華族制度、財閥制度復活を期待するとまでは主張しないものの、由緒ある家が保つ伝統的なモラル、品格などの良い面を戦後民主主義が壊し、民意の名のもとに戦後の行政官僚が横暴を極めたのを、何とかすべきということになる。冷泉家の価値を「文学的価値」とだけ限定せず、由緒ある家が保つ伝統的なモラル、品格にまで拡大している<sup>21</sup>。また、そうしなければ「いわゆる冷泉家流歌道の歌人から、特に明治以後さしたる歌人も輩出していないことを指摘」する、冷泉家文化保護継承の予算を最低限とする主張に反論出来ないとも見られる。

冷泉為人は、日本文化は「茶道」「華道」「能」「歌舞伎」「禅」などだが、その中心に「宮廷文化、歌道」があったとする<sup>22</sup>。小西甚一は同様の考察を行い、『日本文藝史』という大著を何とか要約すれば)中心になる和歌から連歌、俳諧、俳諧の連歌、近代以降の短歌、俳句を問題にし、天台止観を中心に日本の文藝を支える哲学(「さび」「わび」「いき」「つう」「艶」「幽玄」などをも含む)などを考察した上で芭蕉を尊重する。その芭蕉の藝術が藤原定家を中心にした和歌の影響を受けることが大であったことを指摘する。その和歌を中心にした伝統文化を「宮廷文化」とは呼ばず「雅」と呼ぶ。「宮廷文化」「民衆文化」の二項対立は権力を念頭においた分析で、科学技術社会論でいう「技術官僚モデル」に近く、小西のいう「雅」と「俗」の対立は、モード1モード2の対立を連想させ「モード論」に近いのではなかろうか。

これから「宮廷文化論」と「モード論」の微妙な違いを検討してゆきたい。その前に、この両者の関わりが深いことを、まず断っておきたい。モード1モード2の対立を「宮廷文化」「民衆文化」の二項対立になぞらえることは、近代科学技術で世界をリードした英国を考えれば自然なことではある。理学をモード1とし工学をモード2とし、理学は中流階級の高級な学問、工学は労働者階級の低級な学問とする差別は、後世まで続いていた。階級を取り違えると苦労する。王立研究所で活躍したファラデー(概して理学研究と看做せる)が労働者階級と看做されがちであったため階級差別に苦しんだ<sup>23</sup>ほどでもあった。

同じ王立研究所で活躍したデーヴィとファラデーが旅行したとき「ファラデーにとって旅行中の唯一の苦痛はデーヴィ夫人とのいざこざだった。・・・ジュネーヴでガスパール・ド・ラ・リーヴ教授の家に客となったときド・ラ・リーヴはファラデーが単なる従者ではなく研究助手であることを見てとり、食事のとき家族と同じ食卓に招いた。ところがデーヴィ夫人がこれに異議を唱えたので、ド・ラ・リーヴはやむなくファラデーの食事はかれの部屋に運ばせて事を収めた」という記述<sup>24</sup>がある。ここから伺われるのは技術屋から科学者になるにはファラデー

21 冷泉為人、『冷泉家・蔵番ものがたり』,(2009), p243.

22 Ibid., pp.17-18.

23 島尾永康、『ファラデー——王立研究所と孤独な科学者』,(2000), p.57.

24 Ibid., p.57.

ほどの学者でも階級の障壁があったということである。

西欧では伝統的に、科学は支配階級がよりどころとする「知」の一環であったのに対し、技術、つまり工学は労働者階級に属する職人と結び付いたものとして蔑視され、西欧の大学に工学部が設立されたのは理学部、医学部などに比べ、驚くほど遅い<sup>25</sup>。日本の大学は創立当初から工学部があり<sup>26</sup>、医学部、理学部より格下に見られたことはない。およそ階級差別とは無縁で真理の下の平等を目指す学問の理念を考えれば、「宮廷文化」「民衆文化」の二項対立や「技術官僚モデル」のように直接権力を意識する西欧の伝統ではなく、いち早く工学部を設立した明治期の日本のように権力を意識し過ぎないゆき方が推奨出来る。その意味で、「中流階級の理学」「労働者階級の工学」とする区別よりモード1モード2とした分析が推奨出来るし、「宮廷文化」「民衆文化」の対立より小西のいう「雅」と「俗」の対立で考える方が、今後の発展性を期待出来る。

その「今後の発展性」の意味を冷泉家の例で見てみよう。冷泉家の文化紹介の展覧会がフランスで成功し、それが日本における冷泉家評価につながった。その説明として日本人の外国礼賛癖（外国で評価されるものをよしとする）を挙げ<sup>27</sup>、またフランスの文化保護継承のすぐれた点を冷泉為人は指摘する。フランスの個人による文化の収集と寄付、その国家的顕彰と税制優遇措置礼賛（堺屋太一による）の紹介<sup>28</sup>（つまりフランスは良いという外国礼賛になる）をする。つまるところ日本人の権力礼賛、宮廷文化（つまり権力と結びついた文化）礼賛傾向を指摘し、それを由緒ある家が保つ伝統的なモラル、品格の強調によってプラス評価している（あるいは冷泉家発展に必要なだと現実を指摘する）ことになる。戦後民主主義で「宮廷文化」の良さが失われかけたことを嘆くことにもつながる。賛否両論を巻き起こす論であろう。

同じことを小西によれば日本はかつてシナを文化的規範とし、明治以降西欧を文化的規範とする<sup>29</sup>。両方とも国外にある文化を模範とし、その上で自国の文化を築こうとする。これを小西は「雅」と「俗」の対立で捉える。宗教、藝術、科学を媒介とし永遠なるものへの憧れとつながるときの二極が「雅」と「俗」で、「雅」は磨き上げられた高い完成をめざし「俗」は予想のつかない動きをほらみながら無限をめざす<sup>30</sup>。「モード論」につながるこの論調は、賛否両論を巻き起こすというより、細部について様々な検討をさせる刺激になるものではなかろうか。その意味で「今後の発展性」が期待出来る。

25 ケンブリッジ大学工学部創設は1875年（大学の創設1209年より遅れること666年）。

26 東京大学工学部創立は1886年（大学の創設1877年より遅れること9年）。

27 冷泉為人、『冷泉家・蔵番ものがたり』、(2009), p226.

28 Ibid., p.242.

29 小西甚一、「日本文学史」, (講談社学術文庫, 1993), p.20.

30 Ibid., p.16.

以上のように「技術官僚モデル」と「モード論」の関係を検討したことは、日本の文化受容のあり方について重要な未来分析が出来るという副産物を生む。それを次に示したい。

### 1-3 「技術官僚モデル」と「モード論」の関係を検討して今後の日本の文化受容のあり方を予測する

江戸、明治にかけてすぐれた漢詩文が書かれたのに、なぜ急激に衰退したかを論じた『日本文藝史』の一節<sup>31</sup>の注で、「明治期には、医学部の教授でもたいてい漢詩を作った。大正期になると、漢文学の教授しか漢詩を詠まなくなった。昭和に入ってしばらくすると、吉川幸次郎ほか少数の例外を除き、漢文学の教授でも、ふつう漢詩が作れない。<sup>32</sup>」と小西は指摘する。

この理由を検討してみよう。『解体新書』の出版は漢訳洋書の解禁で実現した<sup>33</sup>。人体解剖図といった高度な知見を輸入するのにオランダ語を漢訳する必要があるほど、江戸時代までは漢文が高度な文化輸入の道具であった。明治以後は英語、ドイツ語、フランス語など西欧語で直接輸入が出来るようになる。しかし文化受容の「方式」は受け継がれた面がある。

それは漢文という独特の方式で行われていた。この「漢文方式」を要約すれば、極めて能力の高いエリート（空海がその典型である。中国留学に際し、「シナ語も古代インド語もまちがえず、すっかり理解したことは、瓶から瓶へ水を移し入れるようだった<sup>34</sup>」との評がある）を現地に派遣し、その場合の文化受容の道具としては日常会話を含む現地語（中国語）なのだが、そこで収集した文化の精髓を日本国内に持ち帰った後は、余計な情報を排除し、精選した情報を「漢文訓読方式」という現地の発音情報などもある程度圧縮した独特の「日本語化した中国語」にまとめ、それを日本全国に行き渡らせるというやり方である。

この「漢文方式」は対象国が中国から欧米に変わり、文化受容の道具としての言語が中国語から英語に変わった後も受け継がれ、つい最近までは単語数を限定し、精選された情報の読解に重点をおき、発音を二の次にした語学教育が行われてきた。ドイツ語が特にそうであり、英語にもその残存が見られる。（小西の『日本文藝史』も、「いまの日本でも『外国語教育は、通訳の養成が目的ではなく、外国文化を理解し摂取するためだから、外国の作品や文献がよめれば充分で、発音をあまり気にしなくともよい』という、欧米人にはたぶん理解困難な意見が、識者にも大衆にも根づよい<sup>35</sup>」、と指摘する。）

さて以上の「文化受容の道具」分析を踏まえ、漢文を使ってなぜ漢詩という「文学」を医学

---

31 小西甚一、『日本文藝史V』,(1992), p.355.

32 Ibid., p.357.

33 山崎ほか5名、『科学技術史概論』,(1978), pp.131-132.

34 小西甚一、『日本文藝史II』,(1985), p.64.

35 Ibid., p.70.

部教授が明治期つくる必要があるのかという問題がある。それは趣味とか余技とかいったものであろうか。それにしても、漢詩という、平仄などを考えればかなりの専門的訓練を要する「趣味とか余技」を、忙しいはずの医学部教授が多く行うことは異様である。

これに関連して科学技術社会論学会設立当初「飲み屋談義」「床屋談義」といった「談義」が「学会」になったとの指摘<sup>36</sup>があったことを想起する。さらに次の短歌を見ていただきたい。

感潮域の水質詳しく調べゆく河口堰をば深く問いつつ<sup>37</sup>

長良川河口堰の環境調査をテーマにしたこの短歌を科学者の単なる趣味と軽視することは出来ない。しかも、この短歌の解釈は文学史を中心にした文学研究の見聞だけでは不可能である。どうしても科学技術社会論を導入せざるを得ない必然がある。明治期から現代までの科学者がつくった漢詩、短歌などを集め、その「文学研究」を行えば、それは必然的に科学技術社会論になるであろう。

ところで現在も学会は設立したものの、多くの大学が科学技術社会論を学科や講座として持つ訳ではない。「飲み屋談義」「床屋談義」といった「談義」が「学会」になった感覚に対し、ただでさえ科学者は数式を中心にした学習と、実験・観察に労力をとられ、その結果としての業績を上げるのに忙しいのに・・・といった感覚から、科学技術社会論を否定的な意味で「趣味の延長」視する風潮は残っている。

一方科学者や技術者が短歌を詠むことで短歌の世界が豊かになるだけでなく世の中全体が豊かになる<sup>38</sup>というのが上記短歌を掲載した本の著者の主張である。これは「趣味のすすめ」に過ぎないのであろうか。それとも科学技術社会論学会がめざすものを別の形で主張したことであろうか。

これが後者であるかどうかはさらに検討を要するにせよ、「趣味のすすめ」でないことは朝日歌壇賞を受賞した作品を中心に選歌・掲載し、独りよがり戒め、歌壇への投稿をすすめ、湯川秀樹など科学研究者としても歌人としても著名な作者の作品を掲載する姿勢からも明らかである。ただし、本当に文学研究者から見ても科学者や技術者の詠む短歌が「趣味ではない」と言えるかについては、なお検討を要する。そのために以下を検討したい。

思ひきや東の国にわれ生まれてうつつに今日の日にあはんとは

---

36 佐藤文隆,科学者の将来,『科学技術社会論研究1』,(2002),p.18.

37 諏訪兼位,『科学を短歌によむ』,(2007),p.78.

38 Ibid. p.iv.

タキシード晴れがましければカクテルの杯をかさねてまぎらさんとす

以上の二首の短歌は湯川秀樹がノーベル賞受賞を詠んだものである。これと小西甚一が文化功労者に列せられたときに吟じた以下の俳句と比べてみよう。

輝きや移りて舌に菊の酒<sup>39</sup>

確かに湯川秀樹のノーベル賞受賞は事件としては小西甚一が文化功労者に列せられたことよりは大事件である。しかし、「文学」として見た場合、湯川の作品はひたすらに東洋人がノーベル賞を受賞した喜びを語るだけなのに対し、小西の作品はもっと精緻な技巧が凝らされている。まず、受け取った祝辞への返礼として吟じられたものであって、祝辞にある「輝き」という言葉（小西の国際的な活躍ぶりを表現した）に応えたものである。つまり俳句は独りで吟ずるものではなく「付けあい」の妙という俳諧の連歌の伝統に立つという知見を生かしている。活躍そのものと顕彰の微妙な感覚のずれを「移りて」と表現し、菊の花と日照の関係をも連想させ、「舌」によって視覚と味覚を配合し、受賞の喜び一辺倒ではない近代的な感覚も加味している。小西の作品は俳人としての修練に日本文学研究の研鑽が加わったプロの作品であって、これに比べれば湯川秀樹の作品はシロウトのものと思えるを得ない。

この考察からクロウトとシロウトの区別について考察すれば、湯川と小西の文学作品としての差は文学についての体系的知見の差ではないか。あることがらに体系的な知見を持つ者をクロウトとし、持たない者をシロウトとする。これを踏まえ、医学部教授を含め科学技術者が作る漢詩や短歌などの「文学」を再考すれば、その内容は、科学技術者が研究ロボットではなく喜怒哀楽もあれば社会性もある人間だという叫びであって、重要な点を含む。それを「文学」にして表現した場合、内容について体系的な知見を持つにせよ、文学表現について体系的な知見を持たないので、シロウトの文学になる。またその内容は、（特に社会性に関するものが）科学技術者の「談義」にもなり、それが学会を形成し学術論文での表現ともなれば、体系的な知見を持つに至るので、クロウトの科学技術社会論の業績になるのではなからうか。

しかし以上の類型的分析に当てはまらない「技術官僚」「本物のクロウトの文学者」の両面を兼ね備えた人物が歴史上に存在した。森鷗外である。日本における漢学衰退の原因として、「官員となって黒塗りの馬車で登庁するのが夢だった」青年が「漢学を出世の道具と思わなくなった」ことを小西は挙げる。それでもなお土井晩翠の『天地有情』（明治三十二年刊）などが熱

---

39 原稿というより、落款を押し仕上げた著者直筆の「書」を筆者が所有。

狂的に迎えられた頃までは漢学への尊敬が残っていたとし、その後急激に衰えたとする<sup>40</sup>。こうした時代背景の中、漢学の素養があり、出世にも関心を示し、近代文学に大きく寄与したのが森鷗外であった。

科学技術社会論でいう「技術官僚」は、専門知識を道具として民主主義を阻害する（その結果公害や薬害被害を防がず助長する場合がある）存在とされる。これを適用すると、森鷗外は脚気の原因について軍医総監として誤った判断を押し付け（食物を重視するイギリス派医学と対立し、わざわざ海軍への麦飯支給を禁止して多くの脚気による被害者を出した）、典型的な「技術官僚」モデルの誤謬を犯したことになる。森鷗外を包括的に「技術官僚」と看做すことは出来ないにせよ、この行動については「技術官僚」的と看做せるのではないか。漢詩が詠める医学部教授と同様、森鷗外は漢詩文に通じ、文学研究上評価される。漢詩が詠めるとされる明治期の医学部教授はおおむね帝国大学教授であり、科学技術社会論でいう「技術官僚」的行動をする潜在能力を秘めていたといえるのではないか。

そして冷泉家文化保存継承問題で、同じ文化継承のクロウトである大工、建具師などが（伝統工芸技法について体系的な知見を持つ者といえる）、行政側に立つときと冷泉家側に立つときで態度が変わるという問題を再検討してみよう。

よく「技術官僚モデル」と「民主主義モデル」の差はクロウトばかりの意見を聴くか、シロウトの意見を加味するかの違いだと考えられがちである。しかし同じテーマでシロウトとクロウトが議論したらクロウトが勝つに決まっている。問題は「技術官僚」が何のクロウトかということである。「技術官僚」は釘一本打てず、カンナで木を削れなくても、伝統的な大工の技法について学習し、材料、手間賃などの経費を計算し、交渉のテーブルでクロウトもどきの議論をすることが出来る。一種の「クロウト偽装」の名人なのである。それも自らの責任を逃れるため、あらかじめ組み立てた議論を、本物のクロウトに代弁してもらって下工作にも長けている。

「技術官僚モデル」は、社会的意思決定の現場で、行政官が専門家の意見に厚い信頼を寄せるものといっても、冷泉家文化保護継承問題で明らかなように、専門家はどちらの側に立つかで態度も意見を変えられる。この点に不器用と見られがちの大工、建具師でさえそうなのだ。つまり社会的意思決定をするための補助者として法規に精通し、関係行政部署を運営する体系的知見を持つという意味でのクロウトが官僚であり、専門家も専門に関するクロウトで、その立場から諮問委員会などを通じて参考意見を述べることは出来る。しかし、いずれも社会的意思決定そのもののクロウトではない。社会的意思決定そのもののクロウトといえば、強いていうなら政治家、社会運動家がある程度該当するものの、これらは、少なくとも民主主義国家で、

---

40 小西甚一、『日本文藝史V』、(1992)、p.355.

社会的意思決定のための民意のとりまとめのクロウトであるべきで、個々の社会的意思決定そのもののクロウトであってはならない面がある。その意味で、そもそも社会的意思決定そのもののクロウトは存在しない。あたかも存在するかのような「クロウト偽装」によって、結局は官僚の意のままに行政をコントロールするのが「技術官僚モデル」ではなかろうか。

この考えに立てば、「民主主義モデル」はシロウトがクロウトと戦ってシロウト的な感覚で社会的意思決定を行おうとするのではなく、そもそも社会的意思決定にはクロウトは存在せず、判断はあくまで専門的で体系的な知見とは離れた市民感覚にゆだねられていることを確認して、その上で意思決定をすることではなかろうか。

この「技術官僚」の「クロウト偽装」を許す背景には、文化の受容に関する「漢文方式」が大きく関係しているのではないか。この点を再び森鷗外を問題にして考えてみよう。まず医学部教授が漢詩をつくらなくなった問題を今一度詳しく見てみよう。「技術官僚」の「技術」に、科学技術の知見と併せ科学技術の輸入に必要な西欧語と漢学があったとも解釈出来、帝国大学教授が「技術官僚」の役割を果たす語学を含めた潜在能力を持っていた面がある。また漢詩を詠む行為は、第二次世界大戦時にまであった将官などが自決するとき辞世の歌を詠むのと同じく、国家を背負う責任感の吐露と表裏一体の特権階級意識の現れとも解釈も出来る。これらは科学技術社会論でいう「技術官僚」モデルの「権力者意識」とも解釈出来る面がある。

これが時代とともに変遷してゆく。帝国大学教授から「国家を背負う責任感と表裏一体の特権意識」がやや薄れ、少なくとも官僚と同質のものではなくなり、「科学技術輸入の道具としての漢学、西欧語」は「科学技術英語、科学技術ドイツ語、科学技術フランス語」といった専門的なものに次第に分化して、大学の文学部で講じられる西欧語とは異なるもの（むしろ理学部、工学部の科目になる）になってゆく。

こうした考え方で大正期以後、漢詩を詠むのが漢文学の教授に限られ、さらに昭和期以後は漢文学の教授も漢詩を作らなくなった現象の説明も出来る。文学部所属で語学文学専攻の大学教授に「技術官僚」としての役割も潜在能力もなくなり、文学研究のディシプリンの細分化、特に文学研究からの創作の分離などがこの現象の原因として考えられる。

さらに森鷗外の名誉のために、科学技術社会論でいう科学的知識はつねに「現在進行形」とする「作動中の科学 (Science in Making)」<sup>41</sup>、観察者が観察対象に与える影響を皆無にすることは不可能とする「参加型観察、連上観察 (Participatory Observation, Ongoing Observation)」<sup>42</sup>の概念の導入も必要であろう。軍隊における脚気現象を観察した軍医総監森鷗外を「クロウト偽装」した人物にすることは時代を考えれば酷であり、脚気の研究が十分進

---

41 藤垣裕子編、『科学技術社会論の技法』(東京大学出版会, 2005), p.264.

42 Ibid. p.265.



んでいなかったし、当時は「現在進行形」であったことも考慮すべきであろう。これらの概念は翻って現代の「技術官僚」による「クロウト偽装」にもつながる。

「偽装」するつもりがなくてもクロウトはその時点の信念に基づいて「現在進行形」の科学的（つまり体系的）知見を主張する。それが実態とずれていることには、むしろシロウトが敏感であって、クロウトは、体系的知見がかえって邪魔し、主張している最中であることでもあって、鈍感になる。こうした状況も踏まえて「技術官僚」による「クロウト偽装」を考えるべきである。

また森鷗外の科学的知見は西欧から輸入した（あるいは、しつつある）もので、「現在進行形」なのは科学的知見の脚気への応用だけでなく、科学的知見の体系そのものの「漢文方式」による受容でもあった。

「漢文方式」では文化の受容にエリートが介在し、一般市民はエリートに全面的な信頼を寄せて文化を受容する。誰もが最低限の資格を得た後で留学して文化を受容するのとは違う。この「漢文方式」言いかえれば「文化受容のエリート方式」は日本だけでなく、アメリカについても言えるのではなかろうか。

アメリカは西欧文化を新大陸に押しつける存在としてネイティブ・アメリカンとの対立関係ばかりが注目されるので、まるで白人のアメリカ人は生まれながらに西欧文化を身につけているように錯覚しがちである。けれど、そんなことはあり得ず、独立以後も西欧から文化を輸入し続けた。文化先進国からの絶えざる文化輸入という点では日本と同じ状況であった。こうした西欧からアメリカへの文化の授受にも、その前の西欧大陸からイギリスへの文化の授受にも、ラテン語ギリシャ語による古典学と聖書学を修めたエリートが介在し、それはシナから日本に文化の授受をさせるとき、シナ語と古代インド語を修めた空海などエリートが介在したのと同じことであった。エリートが収集した文化の精髓から余計な情報を排除し、精選した情報を独特の「日本語化した中国語」にまとめたことになぞらえれば、ラテン語ギリシャ語による古典学と聖書学も、情報の集中と会話の軽視について「漢文方式」に近いものであった。限られた数の古典と聖書だけが青少年の教材になった。その教材によって西欧各国のエリートが育成された。

ただしアメリカに限ってはエリートが力を持ちにくかったことはホーフスタッターが「知識人がアメリカでは疎外され、知識人ではないことを示さないと権力を持ってない伝統」として述べたと先述したところである。その結果、権力と結び付く欧米の文化がラテン語ギリシャ語による古典学と聖書学中心であった時代にはアメリカの文化は西欧の格下に見られていた。アメリカと西欧の文化的地位が逆転とはいかないまでも、軍事力、経済力を背景に何とか対等の注目を浴びるようになったのは、科学技術が欧米文化の中心になり始め、理学より工学がエジソンなどによって財力と結び付いた権力獲得に寄与し始め、いわゆるエリートの介在なしに文化

の授受が可能になってからではなからうか。

「モード論」でいえばモード1がモード2にとって代わられ、「技術官僚モデル」でいえば、「技術官僚」の背景にある「官僚一般」が、力を失わないまでも、その権威をある程度割り引かれた時期だともいえるのではないか。「技術官僚モデル」は「官僚一般」という「エリートの権威」が前提になっている。

エリートの介在を前提にしない文化の授受となれば、エリートでない人々の留学や能力審査の緩い移民を介在することにならざるを得ない。しかし全くの普通人の留学や移民では文化の授受とまではゆかない。ある程度能力審査が必要になる。昨今の語学における資格取得が盛んなことの背景にこれがあるのではないか。

また文化の授受だけでなく、文化の創造にもアメリカではエリート主義を否定する動きがある。「教授というエリート」の支配を脱する大学運営がその代表ではなからうか。アメリカでは、教授、准教授、助教授が教員の職階であって、日本との違いは、助手制度がなく、代わりに博士号取得直後の若手研究者をポスドク (postdoctoral fellow) として短期雇用 (三年程度) し、研究教育や学科の運営の面で教授、准教授、助教授に余り大きな差はなく、対等な研究者としてフラットな組織を構成する<sup>43</sup>ことであるという。つまり博士号を資格として対等な研究者同士の関係を構築すること、教授、准教授といった身分保障のある職階をめざして助教授以下が競争するというのがアメリカの組織である。

学問のスタートとしての博士号取得 (かつて、特に文系では、学問の達成を示す勲章であった博士号取得は、文系でももはや目的ではなく資格取得の感覚に変化しつつある) が盛んになったのに、文化受容だけでなく文化創造におけるエリート主義の排除という背景があるのではなからうか。以上を、次項で図式化してみたい。

#### 1-4 「モード論」, 「技術官僚モデル」, 文化の授受方式の図式化

次の図で日本の近代以前のシナ文化受容や、イギリスの西欧大陸文化受容を念頭におけば、A領域は近代以前のシナ文化、西欧大陸文化など技術官僚モデルとモード1が支配的な領域を示す。B領域はそれを受容してきた日本文化、イギリス文化の領域で、A領域からB領域への文化の授受が、これまで考察してきた「漢文方式」になる。モード2に受容側を入れるのは、文化の受容とは暗黙に「自国にとって役立つものを他国から取り入れる」という意識があって「役に立つ」ことを主眼にするからである。

---

43 中島秀人,『日本の科学/技術はどこへいくのか』, (2006), p.28.

	モード 1	モード 2
技術官僚モデル	A領域	B領域
民主主義モデル	C領域	D領域

C領域は各文化が権力構造を離れて夢想する理想的な文化形態，D領域は理想を求めた結果としての実態文化であるアメリカ文化や，日本の権力支配を一時的に逃れた限定された日本国内の階層の文化といったことになる。

西欧の市民革命は西欧をA領域からC領域に変革するもので，流血を伴う。A領域という民主主義モデルもモード2も否定する領域，つまり非民主的かつ非実用的な（実用的な作業に従事する人々の蔑視を含む）王権神授説のような理念があつて強固な階級性のある領域を抱える国が，民主的になろうとしたり，実的なものの価値を見出すには，ときに流血を伴う革命が必要になるのかも知れない。シナにも似た傾向がある。

一方，民主的で実的なものの価値を最大限に尊重するのがD領域で，これを文字通り国家として実現しているのはアメリカ一国である。そこへ向けての世界の潮流が止まらず，世界のアメリカ化が進んでいるともいえる。その一環として国際的な英語検定の資格，学術の競争の場に立てる資格としての博士号が尊重される。ただし，一方でアメリカの世界化が指摘されるように，アメリカがD領域以外の要素を帯びつつある潮流も否定出来ない。

世界中の国々は四つの領域の要素のどれをも持つ。革命がフランス革命ほど流血を伴わない地域の場合は，A領域からの改革というより，すでにC領域を多く抱えていて，その他の領域の変革が問題であった可能性が高い。

アメリカの独立はA領域からD領域への変革が主で，その後のアメリカの歩みで，反西欧，反カトリシズム，反マルキシズム傾向が強いのも，これらがすべて官僚主義的で「当該ディシプリンの知識体系への寄与度で業績評価が同僚によって決まる」モード1のあり方に似ているからと説明出来る。貴族のヒエラルキー，高位聖職者のヒエラルキー，いわゆる赤い貴族のヒエラルキーを学問の「当該ディシプリン」とその評価体系に見立てれば，モード1に酷似している。

また官僚主義もモード1も「エリート主義」と一括りに出来る面があり，その対立概念として「大衆主義」といったことを考えれば，大衆文化に対する深い関心はD領域，即ちアメリカに対する深い関心になる。『キング』やSFをめぐる小西とアメリカの関係は，この図式で簡明に「D領域への関心」と解釈出来るのではなからうか。

## 1-5 中国、韓国に比べ日本が近代化で先んじた理由を図式で説明

前項の図式だけでは抽象的で分かりにくいので、具体的な問題を検討したい。そのため中国、韓国に比べ日本が明治期の近代化で先んじた理由を考えてみよう。その理由を小西は次のように指摘する。中国、韓国が科挙によってエリート選抜を行ったため、エリートの思考が画一化し、近代化に対応出来なかった。これに対し、日本の場合は科挙のような試験がなく、「家」の概念があって、「家」同士の、近代的知見を有するすぐれた人材を育成する競争があった。これが近代化を促進した<sup>44</sup>というのである。およそ近代化とは「家」を否定し「個人」を肯定することと考えていると、科挙という「個人」エリート選抜主義がシナやコリアの近代化を遅らせ、日本の「家」同士の競争が近代化を促進したという小西の指摘は、常識破りの印象を与える。しかし、その「家」の定義が問題ではないか。

このことを、この図式で検討したい。

先述のようにA領域は近代以前のシナ文化、西欧大陸文化の世界で、がっちりした階級性がその特徴である。小西がいう科挙によるエリート主義は、同じく小西が指摘する文藝ジャンルそのものの差別の伝統に連なるのではなからうか。小西によればシナやコリアの場合、価値ある文藝は「官」となる「士」でしか生み出されず、行政の実務しか担当せず政治的責任のない「吏」や庶民には出来なかった。一方、日本の勅撰集には地下すなわち六位以下のものが選ばれるだけでなく選者にもなり女性も選ばれ中には遊女までいるという<sup>45</sup>。

つまり勅撰集を中心にした和歌の世界では、シナやコリアの影響を受けつつ、そのあまりにがっちりした階級性ゆえの不都合を修正して、「和歌的な真理の前の平等」（勅撰集の時期にはすでに和歌学といえる学問が発達していたので、学問の自由、学問で探求された真理の前の平等の萌芽ともいえる）を日本では実現していたことになる。つまり、これは図式でいうC領域（各文化が権力構造を離れて夢想する理想的な文化形態）ではなからうか。

日本の近代化にはこの点が重要であると考えられる。冷泉家の分析で明らかのように、冷泉家という「家」の機能は、「歌道」つまり和歌学の一種の学閥（出身大学だけでなく同じ学問的理念・手法を共有するスクールの意味も込めて）の維持と資料の保存であって、政治的経済的勢力維持という意味の「家」では（一時期の領地争いを除いては）ない。「紅旗征戎は我が事にあらず」という家訓によって権力闘争に加わらず和歌に専念したことが冷泉家存続の鍵だと冷泉為人が指摘すること<sup>46</sup>の意味も、和歌学の学問的理念・手法を共有する学閥（スクール）に徹し、貴重な資料の保全につとめることに徹したからという意味に解釈したい。

44 小西甚一、『日本文藝史I』, (1985), p.110.

45 Ibid., pp.53-54.

46 冷泉為人、『冷泉家・蔵番ものがたり』, (2009), p231.

父子相伝によって冷泉家などの「家」が維持されるのは、学閥のボスが後継者に学問的理念・手法の奥義を伝え学閥の維持・発展を期待することと、貴重な学問資料の保存継承を委託することではないか。和歌学の研究面、創作面を含んだ学閥の対立としては、定家が世に出る直前に、基俊を中心とするグループと俊頼を中心とするグループの有名な対立があった。基俊は俊成を弟子として、俊成は定家という才能ある後継ぎを得、それが御子左家から冷泉家へとつながった。俊頼は結局そのような「家」の確立が出来なかった。才能ある後継者が育たなかったからである。「個人の才能がなければ『家』が成り立たない」と小西自身が指摘する<sup>47</sup>。

シナやコリアに比べ日本が近代化において先んじた理由は、階級制度を固定化する科挙ではなく、「学閥・研究資料維持装置」としての「家」があり、学閥間の競争があり、そうした競争には、その前提となる学問の自由、真理の前の平等を理念とする学会にあたる考え方が、すでにある程度確立されていたからではなかろうか。定家をめぐる和歌学の「学会」は「学閥」の支配、「学閥」のボスの支配といった、現在の学会で考えれば、およそ風通しの悪い学会の極致のようではある。それでも位の低い人物でも勅撰集の選者にし、遊女の歌を選ぶこともする「度量」があったのだ。そして「学閥」の隆盛は才能に恵まれた個人なしにあり得ないように、この意味の「家」は個人の才能なしにはあり得ない。小西の指摘は一見常識破りのように見えて、シナやコリアの科挙は階級性の存続、日本の「家」同士の競争は個人の才能が不可欠なもの、と考えれば、さして不思議はない。

図式でいえばシナやコリアはA領域にとどまっていたのに対し、日本はC領域にあたる考え方がすでにあったから、近代化に成功したのではなかろうか。

以上の見解をシナやコリアの側からはどう見るだろうか。それには以下が参考になる。

明治・大正の地震学を論じた書物<sup>48</sup>の書評<sup>49</sup>が『科学技術社会論研究6』に掲載されている。ソウル大学大学院で科学史を収め、東京大学大学院で日本地震学史を研究した金凡性という著者が、「植民地科学またはローカル・サイエンス」であった日本の地震学が世界的な「先進性」を獲得し、日本と欧米の「先生—学生」関係を逆転させた経緯を語る。これに対し評者は自己の「学問的批判」能力を疑問視しつつ、関連文献を紹介し、科学技術社会論的見地で地震学が市民の安全との接点という意味で意義があるとする。

これにはアジア全体の西欧化、中国、韓国、日本三国に共通の、漢詩文の素養が官僚の必須科目であった状況と、そこからの脱出を考える必要がある。まず、『科学技術社会論研究6』に書評が掲載された、この書物が日本と欧米の「先生—学生」関係を重視することについて述

47 小西甚一、『日本文藝史III』, (1986), p.47.

48 金凡性、『明治・大正の日本の地震学—「ローカル・サイエンス」を超えて』, (2007).

49 柄内文彦、『科学技術社会論研究6』, (2008), pp.162-166.

べる。「先生—学生」関係を単に「知の授与者—受容者」と看做すことは、この書物の読みとして不十分ではないか。「先生—学生」関係は儒教の文化的背景による。中国や韓国など儒教の伝統が存続する地域から留学生を受け入れた日本人教師が驚くのは、こうした地域からの留学生に共通な師弟関係の絶対視である。これは中国、韓国に今も残存する精神的風土である。日本は江戸時代より儒学が統治手段の一つであったものの、儒学と儒教は違う。日本は師弟関係を尊重するものの絶対視はしない。

この差は何かといえば、古代・中世以来の日本伝統の歌学について指摘した、位の低い人物でも勅撰集の選者にし、遊女の歌を選ぶこともする「度量」ではないか。およそ風通しの悪い学会の極致であった勅撰集時代の歌学の「学会」でも、現代の学会の中核理念である学問の自由、真理の前の平等、学問的価値評価は階級によらないとする感覚が既にあった伝統ではなかろうか。それは師弟関係にも適用され、歌学を十分に修めた師であろうが、未熟な弟子であろうが、歌学的真理の前には平等であり、歌学の教養もおそらくは無に等しく、社会的はみ出し者として軽蔑されていたに違いない遊女のものでさえ、その歌に価値ありとされれば、多くの才能が競い、選ばれることが羨望的になる勅撰集に、掲載されるのである。

金凡性の著書が書かれる執筆のモーティベーションとして、「儒教文化で共通性を持つ中国、韓国、日本の三国のうち、なにゆえ日本だけが明治期に研究開発で包括的な成功を収めたか」への関心があると推定される。「研究開発」(Research and Development)は科学技術社会論で頻出するタームである。およそ科学的な「研究開発」である限り、学問の自由、真理の前の平等、学問的価値評価は階級によらないとする感覚が前提になる。この著書が、師弟間の上下関係を絶対視し、その延長でローカル・サイエンスと世界的普遍的科学の差を考えるなら、どこか階級差別で学問的価値評価を左右した科挙の硬直した伝統を想起させる。

もちろん日本とて科学的なものが皆無だった訳ではない。

漢文訓読の学習は、江戸時代、武家に生まれたものの幼少よりの必須学習科目で、各「家」が漢文訓読による儒学を中心にした漢学学習の成績を競い合っ、明治以降の官僚の出世競争にまでつながった。これが日本の科学技術輸入の道具になったことは、言い換えれば日本独特の「エリート語」を創設して近代化に対応したことだと解釈出来る。ただし、これは階級の反映した「エリート語」ではない。貧民の子弟にも学ぶことが開放された「エリート語」である。僧侶・貴族に限られ、かつて英国で「ラテン語聖書をそらんじられたら殺人を犯しても死刑を免れる」制度があったような、特権階級の「エリート語」であるラテン語とは違う。

金凡性の著書に対しては(想定される、その執筆動機への回答ながら)「儒教文化で共通性を持つ中国、韓国、日本の三国のうち、日本だけが明治期に研究開発で包括的な成功を収めたのは、儒教文化と階級意識が結び付かなかつたせいだ」と回答出来る。そして地震被害は階級差別なく発生し、地震のメカニズムという「真理」の前には誰もが平等なのである。その真偽

だけが問題であり、それがローカル・サイエンスか世界的普遍的科学か、「真理」を語る語が「エリート語」かそうでないかは、全く無関係であるといえる。それが身にしみて日々感じられる日本人にとっては、そもそも平凡性のような研究の発想がないであろう。そのことに気づかせてくれる功績が平凡性の著書にあることを、書評の柿内は地震学が「市民の安全との接点を持つ分野」との著者の指摘を肯定した上で「科学と社会のコミュニケーションを考える上での重要な素材を提供した」と表現している。

これに関連し、「市民の安全との接点を持つ分野」として、冷泉家の文化保存継承問題を挙げたら奇矯に過ぎるであろうか。バブル崩壊後の不況下に、冷泉家の文化保護のために、免税期間一年間を一年延長した二年間に約一億三千万円もの寄付が集まったことに対して「世の中の皆様方の深い理解とご支援」<sup>50</sup>を冷泉為人は感慨深く表明する。こうした市民による寄付の動機は、日本国の守護神として皇室と関わりの深い文化への、祈りを込めたものと推定され、それは、やや疑似科学的な発想がなしとはしない。けれど、表現すれば「天皇の下々のものまでへの憐れみ」といった非科学的に取られがちなものの内容として、遊女の歌まで勅撰集に載せる「度量」が学問的価値評価は階級によらないとする感覚を伴い、少なくとも和歌については「階級感覚を排除出来る」日本の皇室、宮廷文化の特質を表わすとするなら、市民が冷泉家に寄付する祈りに似た感覚は、必ずしも疑似科学的とは言い切れない。

地震は地震自体が階級差別をしないものの、公害はそうではない。イタイイタイ病が公害病認定の成功事例であったのに対し、水俣病がそうではなかった原因に、前者の被害者が豊かな水田地帯の農民であったのに対し、後者が社会的経済的構造の周縁に住む貧しい漁民で「悪い魚を海から拾って食った漁民の病気」と看做されていたことが指摘される<sup>51</sup>。「階級感覚を排除出来る」かどうかは市民の安全に直結する。

以上を図式化すれば中国、韓国に先んじた日本の近代化はA領域にとどまる階級感覚と、C領域に踏み出し、階級感覚を排除出来る伝統の差であって、それは地震学、公害問題にまで影響するということになる。

#### 1-6 「文学研究」を「科学」にするため「いわゆるいいがたきもの」の排除

前項では、日本では社会的はみだしもの（遊女）のものでさえ歌が良ければ勅撰集に載せるという、一種の「真理の前の平等」という「科学性」が、和歌学という「文学研究」に中世以来の伝統としてあったことを検討した。

---

50 冷泉為人、『冷泉家・蔵番ものがたり』、(2009), p181.

51 藤垣裕子編、『科学技術社会論の技法』（梶雅範、'第2章 イタイイタイ病問題解決にみる専門家と市民の役割'）、(東京大学出版会、2005), p.34.

それを受けて、英米で長く行われてきたシェイクスピア研究の「科学性」を問題にしたい。

確実な「思想表明」がないシェイクスピア（思想の表明どころか、そもそもシェイクスピアの思想を伺わせる日記の類すら残されていない）について、英米で膨大な「研究」を重ね、多くは論拠のないまま「シェイクスピアの思想」を語り、アメリカでその鳥瞰が行われる（鳥瞰をした論文は後で詳しく紹介する）意味は何なのだろうか。英国の研究は、証拠はないまでも英国人だから分かる血肉化したシェイクスピアの思想への感覚を根拠に、通例のモード1的文学研究を重ねる。（それは何かを論争的に主張するのではなくとも、大英図書館にあるシェイクスピア時代から現代までのウェスト・エンドでの演劇の膨大な上演記録とその地域への密着性などは、まさに資料をして語らせる英国人だから分かる血肉化したシェイクスピアの思想への感覚の根拠にほかならない。）それを鳥瞰するアメリカが行う研究は、むしろそうした血肉化したシェイクスピアの思想への感覚が「ない」ゆえの研究ではなかろうか。

これがかなり意識的に行われていることが伺われる。サルトルが第二次世界大戦で疲弊した西欧からアメリカを訪れ、アメリカ人という存在への感慨として「もっとも画一的に見せながら、もっとも自由であると感じている」と述べたことを紹介し、「非個人的画一主義、個々人が互換可能であることを疑わないという意味での普遍性、そしてそれらを前提としたうえでの無限の個人主義的自由」が、サルトルの看取した「十九世紀アメリカニズムの土壌のうえに開花した二〇世紀アメリカニズムの特徴」だとする古矢旬の記述<sup>52</sup>がある。

「個々人が互換可能である」ならシェイクスピアと芭蕉を取り替えてもよいことになる。シェイクスピア思想への血肉化した感覚など不要である。シェイクスピア作品について「不易流行」「風雅の誠」を論じてもよければ、芭蕉についてキリスト教や人文主義の体系を論じてもよいことになる。これはサルトルが感じた戦後のアメリカの独特の人間観で、科学技術中心の人間観ではなかろうか。アメリカの「市民」とは違い、西欧にせよ日本にせよ、ある程度文化の蓄積がある国の「国民」は、文化的伝統に基づく人間観があって、そこに個人の歴史が刻まれ、簡単に「個々人が互換可能である」ことにはならない。

この点について、小西は一国の文学の本当の理解は本国人でしか分からないことを、特に会話に通じなくて漢文だけでシナ文学を理解しようとした日本文学の伝統に連なる文学者たちの分析で表明する。けれど、それを意識化したこと（漢文だけではシナ文化理解が不十分だった面を指摘し、「漢籍の素養」という「いわくいいがたき」教養を「正確なシナ文化理解」と「不正確なシナ文化理解」とに明確に区分する）は、逆にいえば、日本の伝統文化が血肉化している日本人だから分かる「いわくいいがたき日本文学の理解」を周到に排除する姿勢でもある。

そこには小西の「文学研究」を「科学」にしたいという強烈な意志が感じられる。つまり米

---

52 古矢旬、『アメリカニズム「普遍国家」のナショナリズム』、(2002), p.44.



国シェイクスピア研究学位論文も小西甚一も、まかり間違えばシェイクスピアと芭蕉を一時的に取り替えて考察してもよいとする学問的論理に固執する迫力がある。そうしておいて、厳密な論証で、その不適切さを証明すればよいとする姿勢が見られる。

一口に日本人だから分かる「いわくいいがたき日本文学の理解」を周到に排除する姿勢とはいうものの、それは容易ではない。これをテロ対策になぞらえてみよう。テロの取り締まりに日本人だから分かる「いわくいいがたき日本国内の共同体の理解」を周到に排除する姿勢は、一時的には必ずしも有効ではない。むしろ日本人だから分かる「いわくいいがたき日本国内の共同体の理解」を有効活用した方が国内テロ対策には有効である。ただし、国際的視野に立てば、それがかえってデメリットになる。これを文学に応用し、日本人だから分かる「いわくいいがたき日本文学の理解」を利用した方が国内に限った日本文学研究（むしろ国文学研究と呼称すべき）には一時的に有効であることと同様である。

この観点を、いまして詳しく検討してみよう。

オウムというテロ集団の対策の場合、日本の治安当局はサリンといった大量破壊兵器よりは人間関係に注目する。オウムという集団、オウムの拠点があった上九一色村の村民との軋轢などに注目し、共同体のあり方と構成員の宗教をめぐる考え方に注目する。捜査を行う主眼もそこに行き、事件後、公安調査庁もある程度活躍し、教祖の師弟の就学問題や一般のオウム信者の社会復帰問題まで、すべて日本の共同体の人間関係に集約される。そこでサリンといった大量破壊兵器は、オウムが危険な行動を起こす際の象徴にはなっても、問題の本質と看做された訳ではない。日本人だから分かる「いわくいいがたき日本国内の共同体の理解」を有効活用した方が国内テロ対策は能率よく行えるといえる。

これと対照的なのが、同じオウムに注目するアメリカの対策である。

日本だけでなくロシアにも信者がいることに神経が行き届き<sup>53</sup>、大量破壊兵器を最重要視する観点でテロリスト指定を行う。このFTO(Foreign Terrorist Organization)指定を受けた団体は、①その組織への支援の違法化②米国からの国外退去③米国の金融機関による資金凍結が法的措置として行われ、他国に同様の措置を求めるとともに国際的に組織の孤立化をすすめる効果を期待することになる<sup>54</sup>。こうした指定を行うためには、その組織の危険度を査定する段階が当然あるであろう。また指定後にも組織の観察を続け、危険度がなくなれば指定解除をする。危険度の査定、FTO指定、関係国と協議しながらの組織の観察継続、という三段階を考える対策である。

---

53 グレアム・アリソン、秋山ほか3名訳、『核テロ：今ここにある恐怖のシナリオ』、(2006) pp.49-51. 原著：Allison, Graham, *Nuclear Terrorism: The Ultimate Preventable Catastrophe*, (2004).

54 テロ対策を考える会、『テロ対策入門』、(2006), p.118.

こうしたアメリカの「テロ対策」は、科学技術社会論でいう「リスクアナリシス(Risk Analysis)」に酷似している。その内容も3つのプロセスから構成される。1つは「リスク評価(risk assessment)」であり、有害な性質をもった物質やその状態、プロセス、技術の利用、生物など（これらを「ハザード(hazard)」または「危害要因」という）によって、人の健康や自然環境にどのような種類の悪影響がどのくらいの確率で発生するかという「リスク」を科学的・定量的に見積もる。この結果に基づいて第2に、費用や社会的影響、利害関係者の要請など科学以外の要因を考慮しながら、リスクを最小化し、悪影響の発生を抑えるための具体的方策を決定、実行する「リスク管理(risk management)」が行われる。そして第3に、これら評価と管理の全段階にわたって、リスク評価者（専門家）、リスク管理者（政策決定者）、企業や消費者などさまざまな利害関係者の間で意見や情報を交換する「リスクコミュニケーション」が行われる<sup>55</sup>。

テロリストがテロの手段とした有害化学物質などばかりかテロリストそのものにも「リスクアナリシス」を適用するのが、アメリカ政府のテロリスト指定方式の「テロ対策」である。

従来の「国文学研究」（作者と読者の感性を主眼にした一般的な文学研究を含む）に比べて、小西甚一の手法で際立つのは、パウラ説の原始歌謡発達段階説を紹介し<sup>56</sup>その適用の是非を日本の古代・中世文藝について検討することに象徴されるように、フィールドワークの手法（文献中心の文学研究者から反感を持たれることを承知で）と様々な段階を設定する分析を応用している点である。これは上記のアメリカの「テロ対策」や科学技術社会論の「リスクアナリシス」に酷似する。「テロ対策」はそのままフィールドワークと様々な段階を設定する分析を組み合わせた「テロリストの行動分析」という社会論の研究にもなりうる。これに近いことを小西もやっている。古今東西の「文学者の行動分析」という社会論の研究に近い面をも視野に入れている。これらに共通するのは「科学」として「いわくいいがたきもの」の排除である。

「いわくいいがたき共同体の理解」と「いわくいいがたき文学の理解」の並行関係を指摘し、これらを有効活用するのが日本の治安当局、伝統的な「国文学研究」、「英国のシェイクスピア研究」になり、これらを周到に排除するのが、アメリカの治安当局、小西甚一、米国シェイクスピア研究学位論文の多くの論文になることを検討してきた。

論理的に考えて、「文学研究」が「科学」になれば、その人間観から「いわくいいがたき国籍固有の文学の理解」といった国籍ファクターを排除し、極端にはホモ・サピエンスとしての人間観の導入も検討すべきという考え方になる。

科学技術が前提とするホモ・サピエンスとしての人間観であれば、個人が背負う文化的伝統

55 藤垣裕子編、『科学技術社会論の技法』, (東京大学出版会, 2005), p.273.

56 小西甚一, 『日本文藝史I』, (1985), p.121.

を排除出来るので簡単に「個々人が互換可能である」ことになるし、「もっとも自由であると感じている」ことになる。それは文化的伝統から解放された「自由の享受」ではなからうか。これが、シェイクスピア思想や芭蕉の「思想」への血肉化した感覚を研ぎ澄ますエリート主義から解放され、「技術官僚モデル」から解放され、「モード論」でもモード2を重視するアメリカの姿勢につながってゆく。

要するにアメリカのシェイクスピア研究の多くは「文学とは人を言語によって感動させる科学技術」と考え、この科学技術についての科学技術社会論を展開しているとしか思えない。小西甚一にもその傾向なしとしない。

この観点について参考になるのは「科学の真偽はすべて自然によって決定されるほど確実ではないが、社会によってすべて決められるほど不確実ではない」「科学知識の創出には、自然からの作用だけでは不十分で、社会との相互作用が必然的に含まなければならない」という記述である。これはクーン以降の英米系の科学論を高く評価する理由として中島秀人が『科学論の現在』という書物の「まえがき」で書いたこと<sup>57</sup>である。

これを文学に応用すると「文学の感動はホモ・サピエンスを感動させる科学技術だというほど普遍的ではないが、国籍・民族・個別言語・習俗・生活信条といった社会によってすべて決められるほど『いわくいいがたきもの』ではない」「偉大な文学の創造には、人間の普遍性に迫る努力だけでは不十分で、国籍を含めた社会との相互作用が必然的に含まなければならない」ということになる。

英米系、それも特にアメリカ社会の質がそうさせるのか、こうした科学と社会の両方をにらんだ感覚が、アメリカでは科学技術研究にも文学研究にも当てはめられる感覚がある。

一方、日本は、しばしば単一民族国家であるとの誤解がなされるくらい、長年にわたって同じ行動様式を持つ人々の集合体として認識されてきた。同時に、明治以来（あるいはもっと昔に遡る）の技術練磨志向が、オウムを例にとれば、捜査技術としての科学を磨き上げてきた。アメリカと違って、それはあくまで技術に過ぎず、決して日本全体の統一理念のような政治哲学に高められ、科学と社会の両方をにらめる感覚に育っている訳ではない。

アメリカの特徴は「科学技術全般へのこだわり」であり、日本の特徴が「技術練磨志向」だとしたら、東大阪や大田区の最先端技術は日米の「こだわり」の共通項になる。これは科学技術社会論が目指すことでもあり、またこの職人芸と冷泉家の祖である藤原定家の和歌の伝統とは密接に結びついている。ただし冷泉為人が専門とする美術史の観点で冷泉家の美術工芸品を論じるのではなく、あくまで「文学」を問題にするなら、共通項は「アメリカがこだわる科学技術」と「日本の職人芸としての技術練磨」に関する倫理ではなからうか。

---

57 金森修・中島秀人編著、『科学論の現在』,(2002), p.iv.

それは科学技術社会論でいう「技術倫理／技術者倫理 (Engineering Ethics)」と関係することになる。「技術倫理」はマイクロ=米, メソ=日, マクロ=欧という風に, 社会背景によって強調するレベルが違い, 以上の3レベルにメタを加え, 4レベルがあるとされる<sup>58</sup>。

そこで、「はじめに」を終わるにあたって, こうした倫理を含む様々な観点に触れておきたい。その場合, 西欧, アメリカ, 日本での「科学と社会」を両にらみする様式の違いとして, 技術者倫理が注目されることになる。

## 1-7「科学」であろうとする「文学研究」が関連する「倫理」を中心にした様々な観点

### 1-7(a) アメリカのマイクロ倫理

メタの倫理は後で論じることにして, ここではマイクロ, メソ, マクロの倫理を問題にし, 特にマイクロの倫理がアメリカで注目され, これがモード2への転換であることを述べたい。例えば環境政策を国や国際社会の政策としてとらえるのがマクロ, 国内制度としてとらえるのがメソ, 個人の行動として (ハイブリッド・カーを購入するか否かといった) とらえるのがマイクロとして, ほぼ間違いないであろう。こうした個人の行動規制としての倫理はアメリカ社会の特徴であって, それは科学技術に限らない。

シェイクスピアの晩年のロマンスに見られる牧歌志向には現状への根源的懐疑があるとの米国シェイクスピア研究学位論文の指摘<sup>59</sup>がある。理想郷を夢見る「夢と同じ物質で出来ている」(『嵐』四幕一場) 我々は, 悪夢との戦いを余儀なくされているという認識はかなり普遍的である。ただし牧歌志向と現状への根源的懐疑を結び付けるのはアメリカ特有の感覚ではなかろうか。環境問題を例にとれば, 西欧や日本は牧歌的世界に環境問題はなかったことを歴史として記憶し, そこに戻すことは出来ないけれど, 出来ればかつての牧歌的世界に環境を近づけたいと考える。アメリカには恐らく「理想郷に憧れた記憶」はあっても「理想郷の記憶」そのものはないのではなかろうか。ピルグリム・ファーザーズの伝説的渡米以来, 常に「現状への根源的懐疑」を抱いて, 集団というより個人の行動として西部開拓を続け, あるいは移民としてアメリカに来て, さらにアメリカ国内を移動し続けた記憶があるのみなのではないか。それがシェイクスピアの読みにまで反映する。

理念的な理想を胸に個人での行動を考えるのが一般的なアメリカ市民の倫理感覚であって, 昨今は, 科学技術に関する倫理問題が注目を集める。それが先述の, 人々の抱える悩み (とい

---

58 Ibid. p.262.

59 Patrick, Mark Stewart, *Italy and the burden of history in Sannazaro's "Arcadia" and Shakespeare's late pastoral (Jacopo Sannazaro, William Shakespeare)*, (2004). CR||306||1

う「問題」)の文学作品享受による「解決」への関心であって、モード1は、応用すれば同様の「問題解決」を目指すものの、早急な「解決」探求ではなく、文学作品享受のメカニズム研究を伝統的に積み重ねるエリート集団のありかた(シェイクスピア研究でいえば英国の学会)なのに対し、モード2が市民の悩み解決、つまりミクロの倫理であり、米国シェイクスピア研究学位論文の趨勢ではなかろうか。

では「文学研究」を「科学」にしようとした日本の小西甚一の場合はどうなのだろうか。

#### 1-7(b) 日本のメソ倫理

英米のモード1的な論考を鳥瞰し功罪を論じる形で「分野横断的」な(つまりモード2的な)論考を行うアメリカの博士論文(次項で詳しく紹介する)と、小西による芭蕉への宋代の新儒学の適用とは、酷似する点がある。文献精査は人文科学の基本だとしても、小西の手法は少し違っている。芭蕉について「不易流行」「風雅の誠」を論じても、いわゆる文藝批評的な論考、俳論といわれるものに一般的な、日本人だからこそ分かる芭蕉の「思想」への血肉化した感覚を研ぎ澄ますといったものではない。

これは「いわくいいがたきもの」の排除という、基本的な科学性志向のみならず、日本固有の制度に切り込む研究姿勢に関してくる。

科学技術社会論では新聞記事、審議会議事録、白書、原子力委員会などの資料を第三者の立場から「内容分析(Content Analysis)」する<sup>60</sup>。小西による宋代の新儒学関連の文献、芭蕉の弟子の記述の精査、次項で紹介する英米でのシェイクスピア研究の積み重ねを鳥瞰した論文の作者による関連する文献、シェイクスピア時代の該当する劇作品テキストの精査は、科学技術社会論の「内容分析」に当たる研究手法に近い。要点は「いわくいいがたき理解」「英国人だから分かる、あるいは日本人だから分かる、シェイクスピアや芭蕉の思想」を排除する点のみならず、研究対象がとらわれている「制度」を白日の下に晒す研究姿勢になる。先述の公害問題では、イタイイタイ病と水俣病を比較し、イタイイタイ病問題にはない「悪い魚を海から拾って食った漁民の病気」と看做す水俣病問題固有の差別意識を指摘する。これが可能になるのは研究姿勢自体に「いわくいいがたき理解」を排除する姿勢があるからではないか。同時にそれは差別意識を利用した不公平な「制度」をあぶり出す。

日本固有の倫理問題は、こうした偏見を組み込んだ「制度」の排除が検討の中心であって、偏見と戦う姿勢が国はともいえる中で個人の行動を問題にするアメリカとは違う。偏見と戦う気力のない人々を元気付け、偏見が無意識化し、制度に組み込まれているところを洗い出す作業が科学技術社会論に課せられた作業になる。

---

60 藤垣裕子編、『科学技術社会論の技法』(東京大学出版会、2005)、p.270.

外国人に説明することも目標の一つにして英文で同時出版した小西の『日本文藝史』に貫かれているのは米国シェイクスピア研究学位論文とも共通した、科学技術社会論的手法である。この点は「国文学研究」としては画期的であって、あるいは一般的な日本文化研究からはみ出しているともいえる。特に中世が存在しても近世が存在せず、いきなり中世から近代になる時代区分などは、小西の論理的定義付けなしには理解しにくい。ただし、これも偏見が無意識化し、制度に組み込まれているところを洗い出す作業であることを指摘してゆきたい。

小西の研究の科学技術社会論的性格をはっきりさせるため、日本の「近世」という時代区分が小西の『日本文藝史』にないことを考察してみよう。小西が江戸時代を近世とせず中世とするのはシナ文化の影響が残っているからである。小西自身の記述では「わたくしの定義した中世は、シナ文化の受容により日本の中核的な表現理念および主要な技法が形成された時代のこと<sup>61</sup>」となる。ルネッサンス、バロックという西欧での時代の進展や、西欧の自然科学の発達の影響を無視して「日本は江戸期まで中世だった」という小西の主張を理解するには、それぞれについて説明がいる。

「西欧のルネッサンスが新しい人間観をもち、伝統的なキリスト教の束縛から解放されたところに重要な特質を示すのに対し、日本の十六世紀はむしろ仏教が深く浸透した時代であり、人間自身の立場から仏教をとらえなおすという動向は生まれなかった<sup>62</sup>」「彼岸欣求と現世肯定・禁欲と享楽・神意と自然など相互に背反しあうものが、調整されることなく雑居するのをバロック文藝の特性だとすれば、十六世紀の『雅俗』はきわめてバロック的<sup>63</sup>」といった小西の記述がある。『解体新書』の出版は（漢訳洋書の解禁で実現したことを先述した）、その漢訳者について、「かれらのオランダ語では『文藝』まで理解するのは無理だった<sup>64</sup>」とする。つまり「科学」と「文藝」は歴史的取り扱いでは別のものとした上で、「文藝」の中核に西欧文化が入り込むことは江戸時代にはなかったとするのである。

そもそも「平安時代」、「江戸時代」という呼称を小西は使わない。これらは権力の所在地を時代の呼称とすることで「京都の宮廷文化」「江戸の宮廷文化」を前提にしている。それは「文学研究」を「科学」にしたかった小西の強い意志の表れではなかろうか。つまり「宮廷文化」の一環としての「宮廷文学」ということはあり得ても、「宮廷科学」ということはあり得ない。いくらアイザック・ニュートンがロイヤル・ソサエティーの会長として君臨し、宮廷の庇護を受けようと、「宮廷科学」ということはあり得ない。権力の支援を「文藝」以上に必要とする

61 小西甚一、『日本文藝史V』,(1992), p.15.

62 小西甚一、『日本文藝史IV』,(1986), p.24.

63 Ibid. p.74.

64 Ibid. p.210.

科学でも、その普遍性がしっかりしているのです、最後の一线で「宮廷科学」なる呼称の存在を妨げている。小西は「文藝」についても、いかに権力者の庇護を必要とし、宮廷サロンで花咲いた「文藝」であっても、「科学」と同じ普遍性を持つジャンルにしたかったのではなかろうか。同時に、それは「科学」と同じ普遍性を有するはずの「文藝」の、その肝心の普遍性を見えなくする「制度」をあぶりだす。

小西のいう「中世」は「シナ文化を規範とする歌学会（研究・創作の両面を持つ文藝研究の場）がモード1として君臨した時代」と言い換え、平安時代は文字通りそのモード1が機能した時代であり、室町から江戸にかけての時代はモード1に台頭著しいモード2（和歌、連歌というモード1が取り扱う文藝を俳諧の連歌、発句だけ独立した俳句につながる俳諧に変え、公卿だけでなく庶民が享受するものに変える動き）が入り混じった時代となるのではないか。小西のいう「雅」はモード1、「俗」はモード2、「雅俗」はモード1モード2の入り混じりを意味するとすれば、かなり辻褄が合う。小西の文藝史は「日本固有のモード2の時代」「シナを意識したモード1の時代」「シナを意識したモード1モード2の入り混じり時代」「西欧を意識したモード1の時代」「欧米を意識しつつ未知との遭遇要素を抱えるモード2の時代」といった時代区分の提唱になっている。

事実上文化規範がシナから西欧に移り、その影響も次第に浸透し、鎖国状況の中で「近世」から「近代」への移り変わりもある中で、あえて「文藝」という指標を立て、「中世」という時代区分を江戸末期まで押しつけた小西の分析から、日本では「文化運用の制度」と「文化の内容」が遊離していたとの指摘も出来る。「制度として」「中世」の衣をまとっていた日本が、突然その衣を脱ぎ捨てたのが明治維新であったともいえる。こうした「制度」の問題に関するは科学技術社会論でいうメソ倫理になる。

### 1-7(c) 西欧のマクロ倫理

次にルネッサンス、バロックという西欧での時代の進展とその日本への影響を小西が無視したかを問題にする（日本の文化に注目し、「無視」の問題をその実態の問題とするなら、すでに前項で解決済みである。そうではなく、日本に影響を与えた西欧自体の近代を分析して、西欧そのものを、ここでは問題にしたい）と、シェイクスピア研究が参考になる。そもそもシェイクスピアはルネッサンス作家かバロック作家かという問題があって、このことがこの問題の分析に役立つ。これには様々なシェイクスピア研究が描くシェイクスピア像を分類し鳥瞰した次のアメリカの博士論文が参考になる。

(1) プルジョアのヒューマニスト、(2) キリスト教的ヒューマニストとしてのシェイクスピア、(3) 文化的物質主義が示すラディカルなシェイクスピア、(4) 家父長的シェイクスピアといった四つのケースを挙げ、(5) マルクス主義的批評（アメリカでは経済や社会構造と

結びつけた批評はマルクス主義的批評とされる)を論考し、(6) ティリアッドなど古典的シェイクスピア批評も踏まえ、この傾向の批評の功罪を分析するもの<sup>65</sup>である。

この「鳥瞰」を利用すると、(1)ブルジョア的ヒューマニスト、(2)キリスト教的ヒューマニストとしてのシェイクスピア、(6) ティリアッドなど古典的シェイクスピア批評は、小西がいう「西欧のルネサンスが新しい人間観をもち、伝統的なキリスト教の束縛から解放されたところに重要な特質を示す」一環としてのシェイクスピア像になり、(3) 文化的物質主義が示すラディカルなシェイクスピア、(4) 家父長的シェイクスピア、(5) マルクス主義的批評(アメリカでは経済や社会構造と結びつけた批評はマルクス主義的批評とされる)に映るシェイクスピアは、「彼岸欣求と現世肯定・禁欲と享楽・神意と自然など相互に背反しあうものが、調整されることなく雑居するのをバロック文藝の特性」と小西が記述した状況に調和するシェイクスピア像になるのではないか。

ここに、ラカンやベーコン、ロック、アリストテレスなど交えたバロック芸術論を展開し、ダンの詩や『嵐』などをバロックで括るところに意味がある論考<sup>66</sup>がアメリカの博士論文にある。シェイクスピアをこのように捉えると、シェイクスピアがルネッサンス作家だとして、そのキリスト教の束縛から解放された人間観はどこかへ行ってしまう。

このことで考察すべきなのは、ルネッサンスの「キリスト教の束縛から解放された人間観」とバロックの「禁欲と享楽などの雑居」が区別されるのは、例えば西洋美術史というモード1の特性だということである。ミケランジェロの絵画や彫刻はルネッサンスの「キリスト教の束縛から解放された人間観」によるもので、ベルサイユ宮殿の装飾はバロックの「禁欲と享楽などの雑居」だとするのは、西洋美術史という蝸壺の専門主義によれば筋が通る。しかし、ミケランジェロの絵画がバチカンのシスターナ礼拝堂にあるのは、法王のキリスト教強化政策の一環と解釈すれば、事情は異なってくる。一連のルネッサンス絵画自体が「解放された人間観」を示しても、それを庇護したバチカンは決して「キリスト教の束縛」を否定した訳ではない。ミケランジェロの絵画をバチカンのシスターナ礼拝堂で見ると、絵画だけに注目すればルネッサンス、礼拝堂全体を支配するバチカンの意図に注目すればキリスト教の強化、そして全体を見渡せばバロックの「禁欲と享楽などの雑居」を考えないではいられない。

シェイクスピア作品が「解放された人間観」を示すものとして、有名なハムレットの「人間は何という傑作だろう！」(What a piece of work is a man!<sup>67</sup>)は、それだけを見れば確かに

65 Siar, David Aaron, *Marxist Criticism of Shakespeare and the Problem of Determination: Four Case Studies*, (1996). MF||194||20

66 Bornhofen, Patricia Lynn, *Cosmography and Chaography: Baroque to Neobaroque, A study in Poetics and Cultural Logic*, (1995). MF||189||16

67 Shakespeare, William, *Hamlet*, (1600), (II, ii).



そうも取れる。鳥瞰した先述の分類でいう（6）ティリアッドなど古典的シェイクスピア批評の時代にはこれを根拠にシェイクスピアをルネッサンス作家とする論がなされた。しかし、昨今はそうした論調は影を潜めた。そもそも英国を中心にしたモード1のシェイクスピア学会ではシェイクスピアをどのような思想史系列に分類するかにあまり関心を払っていない。あえてここで考察すれば、これはむしろ「彼岸欣求と現世肯定・禁欲と享楽・神意と自然など相互に背反しあうものが、調整されることなく雑居するのをバロック文藝の特性」と小西が記述した文脈で捉えることも可能ではないか。

実際喜劇を中心にそうした言説にシェイクスピア作品は満ちている。ティリアッドの時代にはモード1の蝸壺性が徹底していて、シェイクスピア学会では悲劇の専門家と喜劇の専門家が分かれていて、悲劇の専門家は大っぴらにルネッサンス作家シェイクスピアについて語り、喜劇の専門家は密かにそのバロック性を思いつく公言は避ける状態であったのではないか。この状況の思いつく解説としては、中世のキリスト教から解放された人間観というルネッサンスを身にしみて感じるのインテリであって、庶民はむしろバロック的状况に生きていて、シェイクスピアはインテリと庶民の双方を描いた作家であったともいえる。

そこには第二次大戦後ファシズムから解放されたという想いが联合国側全体と枢軸国の進歩的インテリにあって、インテリは一応シェイクスピアについての知識を持ち、その中身はハムレットという近代的知性の象徴が悩む姿であり、解放された人間賛歌を独白するという知識であった。

ここで注目すべきは第二次大戦後も、恐らくは現代も、西欧ではインテリ支配が続いているということである。「知識人がアメリカでは疎外され、知識人ではないことを示さないと権力を持ってない伝統」という先述のホーフスタッターの言を借りれば、「知識人が西欧では文化、政治経済のあらゆる面を支配し、知識人であることを示さないと権力を持ってない伝統」があることになる。日本では、インテリと非インテリの区別が定かではなく、武士の台頭時にもアメリカのカウボーイが「学問に無知であることを誇る」ような伝統はなく、ある程度権力を握れば学問も行い、一部は公卿化さえする。また庶民が完全に無知だとは言いきれない。寺子屋通いなど、庶民の勉学熱は伝統的なものである。日本の文化政策は個人や階級ではなく「制度」に従って動く。反知性の伝統ゆえ文化的統合が不可能なアメリカは「民衆の国家」なのでマイクロ倫理が、制度が文化を支配する日本はメソ倫理が、そして、インテリ支配が徹底している西欧では、インテリの行動倫理はそのままマクロな技術者倫理になるのではなかろうか。

#### 1-7(d) メタ倫理

シェイクスピア研究の学界におけるハムレット像と第二次世界大戦以降のインテリの動向の関係を追うと、やがて原爆の惨禍が認識され、科学者の倫理が問題になる。（つまり「技術者

倫理」でいうメタ倫理である。) 原爆か原子力の平和利用かといった二者択一の形で提示された問題がインテリの課題となる。ここでもハムレットにインテリの悩みが重ねあわせられ、悲劇作家としてのシェイクスピアが重要視される。ルネッサンスの人間解放を、人間性を抑圧した中世キリスト教にかつてはファシズムを重ね合わせ、今度は冷戦状況下の軍拡競争の状況に重ねて、インテリが世界に訴える形をとる。そこには悲痛な叫びであることが求められ、シェイクスピアの悲劇が強調され、喜劇も、バロック性も、考慮するゆとりはなかった。

やがて現代では科学者の責任の意味が、倫理観なしに原爆製造をした責任から、ゲノム解読、遺伝子組み換えなど、長期的な影響予想が出来ない状態での公共的意思決定の責任に移行しつつある<sup>68</sup>。米国が大量破壊兵器に注目することは、時の政権の政策の問題というより、それは世界の科学技術の状況認識の問題であり、「知の責任論、科学者の社会的責任 (Social Responsibility of Scientists)」の問題ではなからうか。

これらが、さらに「科学の不確実性 (Scientific Uncertainty)」<sup>69</sup>や「不確実性下の責任 (Responsibility under Uncertainty)」<sup>70</sup>の問題に置き換えられつつある。かつて「原水爆禁止」の形で提起された事柄が、「予防原則 (事前警戒原則) (Precautionary Principle)」<sup>71</sup>の問題として考えられる事態に立ち至っている。モード2でなければ世界的に深刻な問題も解決出来ない事態に至ったといわざるを得ない。

シェイクスピアをバロック作家とした先述のアメリカの博士論文は、ラカンやベーコン、ロック、アリストテレスなどを交えた議論をする。ここに並んだ名前を見るだけでも、モード1の蛸壺性とは無縁であることが分かる。英国や日本のモード1の学会の感覚では、大著でなければ取り扱わないテーマを一博士論文にまとめている。その一事をとってもアメリカがシェイクスピア研究に関する限りモード2が徹底していることが分かる。先述のように、文学研究一般を人々の抱える悩み (という「問題」) の文学作品享受による「解決」とし、モード1は、応用すれば同様の「問題解決」を目指すものの、早急な「解決」探求ではなく、文学作品享受のメカニズム研究を伝統的に積み重ねるエリート集団のありかたとすれば、以上の事情がよく見えてくる。蛸壺の専門主義、当該ディシプリンの知識体系への寄与度で業績評価が同僚によって決まるモード1方式で歴代のオックスフォード大学シェイクスピア講座教授を頂点とした研究体系を積み上げてきたやり方と、アメリカのモード2方式の違いは、まさに科学について科学技術社会論が問題にしてきたことである。

68 藤垣裕子編、『科学技術社会論の技法』(東京大学出版会, 2005), p.269.

69 Ibid., p.259.

70 Ibid., p.271.

71 Ibid., p.272.

「核兵器廃絶」といったテーマはメタ倫理の象徴にもなりうる。これが第二次世界大戦直後のエリート知識人による叫び（世界平和とアピール七人委員会など。湯川秀樹、朝永振一郎など、明らかにモード1の代表者が入っている）からアメリカ発の黒人大統領オバマによる演説になって、同じメタ倫理でも、モード1に支えられたものとモード2に支えられたもの（政治家は分野横断的で問題解決型の典型的なモード2）との違いを実感させる。黒人大統領は、それだけで多文化主義との関係も想起させる。

#### 1-7(e) 多文化主義と「テロ対策」が行動主義的政治哲学へ

「はじめに」を終わる最終項目として科学技術社会論の学術チームと本論文シリーズとで関係するものを挙げておきたい。それは本項目の標題で示すアメリカの状況を示すことになる。

「科学の真偽はすべて自然によって決定されるほど確実ではないが、社会によってすべて決められるほど不確実ではない」「科学知識の創出には、自然からの作用だけでは不十分で、社会との相互作用が必然的に含まなければならない」という先に引用した中島の記述はここにも響いてくる。

一方で科学の客観性を認めない「反射性 (Reflexivity)」の概念<sup>72</sup>といった「社会」の強調は極端に過ぎるし、一方永遠普遍の客観的真実を探求する科学の立場を掘り崩す必要も科学技術社会論は認める。社会を強調すればマイノリティーへの差別問題も含まれる。永遠普遍の客観的真実を探求する科学の立場は、アイザック・ニュートンなど科学的発見の業績がWASP（白人・アングロ・サクソン・プロテスタント）に集中したことから、十九世紀以来の白人優越主義につながるからである。これと並行して、なぜシェイクスピアがマイノリティーの心をとらえるかが2001.9.11テロ以降注目され、昨今の米国シェイクスピア研究学位論文で多く議論されている「多文化主義」と深い関係にある。詳細はその項目に譲るとして、科学の客観性にやや疑問符を付ける動きは、科学技術における「多文化主義」の立場を科学技術社会論の立場が含むとも、科学的真理の前に差別はないことの確認ともいえる。

また先述の多文化主義の立場の学習プログラムとシェイクスピアを論じたものも、ここに関係する。それだけでなく、この論文はモード2で書かれ、教育を含む様々な問題と関係する。

「テロ対策」、「文学研究」の手法の異同、並行関係について考察してきたことは、日米の「ガバナンス (Governance)」<sup>73</sup>の違いと関係するといえる。それはそのまま「いわくいいがたき」

---

72 Ibid., p.271.

73 Ibid., p.260.

要素を認めるか否かを介して「科学とは何か」を問うこと（「境界作業 (Boundary Work)」<sup>74</sup>「科学教育／技術教育 (Science Education/Technology Education)」<sup>75</sup>と関連) が国の中心課題であるアメリカと、それを巧みに避けることが（特に戸籍制度によって日本国民を統治する法律、倫理との関係で「いわくいいがたき」要素が保護されている）求められる日本との違いになる。日本はオウム問題も日本的共同体固有の問題として捉えることは先述のとおりである。

こうしたことをクーンのパラダイム論の所産である「科学の目的内在化 (Finalization Theory)」で説明してみよう。まずテロ対策から説明すれば、「テロリスト」が「テロ」の手段とした有害化学物質への対処と、「テロリスト」そのものへの対処は本来別であるべきだ。しかし、科学の探求は、純粋に分野自律的な問題設定だけでなく社会的関心の影響を受ける<sup>76</sup>。アメリカの場合は科学技術発展のマイナス面対策に、いつしか社会的関心が高い「テロ対策」が混じりこんでいるとも、「テロ対策」に、本来別のものである「テロの手段としての科学技術」対策方式が適用されているともいえる。

このことと並行関係にある文学論を拾えば、テキスト中心で様々なメディアが発達したため、舞台から俳優の存在感が失われたことを、シェイクスピア、ベケットの現代における上演について哲学的に考察した論考<sup>77</sup>が参考になる。テロを演劇に、テロリストを俳優になぞらえるのは不謹慎かも知れない。けれど、国際社会でのアメリカの「テロ対策」は、体系だって科学的で網羅的であるゆえに、個々のテロリストの存在感を無視する面がある。

ここでアメリカの「テロ対策」がこのような形を取らざるを得ない事情を説明すれば、アメリカは多民族国家であり、人の行動について、千差万別の民族や、民族を細分化したコミュニティーの事情を勘案することが困難な面がある。むしろ普遍的な人間観として科学的なホモ・サピエンスを強調することの方が国家としての統一を保てるのではなかろうか。犯罪捜査も「リスクアナリシス」も「テロ対策」も、すべて科学的であるときに、最もアメリカ政府は力を発揮する。そこには思想としての科学が行動主義的な政治哲学にまで高められている。

---

74 Ibid.p.262.

75 Ibid.p.257.

76 Ibid.p.259.

77 Fox, Michael David, "There's our catastrophe": *Emotional response and the staging of presence in the theatre of Shakespeare and Beckett (William Shakespeare, Samuel Beckett, Ireland, France)*, (2004). CR||306||1

## 2. 科学論・科学技術社会論の視点での「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」の分類と考察

### 2-1 「技術官僚モデル」から「モード論」へ

#### 2-1(a) 「技術官僚」の教養が「モード論」で崩壊

本論文シリーズの副題に掲げた「文化受容の『漢文方式』から『資格（英語・博士号）方式』への転換」の典型例は以下の事柄である。

青色発光ダイオード発見者中村修二が大学入学にあたって「さあこれから好きな物理を思いっきり勉強してやろうと思ったら・・・チョーくだらん教養課程の必修科目の数々・・・」<sup>78</sup>という心情吐露である。暗記嫌いゆえの漢文、歴史といった科目への高校以来の嫌悪を押し殺し、辛い受験勉強をして入試に合格後に、さらに教養科目としての古典、歴史科目系統の必修科目が立ちはだかる。大学入試廃止論につながる心情吐露である。

中村修二の大学入試廃止論にそのまま賛同する人は多くはないであろう。ただ、金凡性の論文について検討し、中国、韓国に比べ日本が明治期の近代化で先んじた理由を中国、韓国が科挙によってエリート選抜を行ったため、エリートの思考が画一化し、近代化に対応出来なかったとの小西の指摘を検討したことと関連付ければ、中村の主張にある程度の真理があることが見えてくる。

大学入試センター試験との組み合わせによって、大学入試が全体として「現代の科挙」の役割を果たしつつあったことは否めない。旧制帝大と一流私立大学合格者が「現代の科挙」の合格者で、そうした人々だけが留学して欧米から文化受容する役割を担い、日本の将来を決められるという風潮が確立しかけていた。

中村の研究を支えた創業者の社長から研究打ち切りを命じた二代目社長への方針変更は、中村の研究を外部技術者に見せ、技術開発の一般的潮流から外れていることが知れ渡ったため<sup>79</sup>ともいわれる。昭和三十年代の日本の右肩上がりの成長を支えた「技術官僚」を含む「官僚」と大企業所属の研究者には、「現代の科挙」の合格者であって、しかも進取の気性に富み、「漢文方式」であっても欧米の新しい研究を取り入れ、独自の開発もすればリスクも取る人々が多かった。それが、成功が定着するにつれリスクを取らなくなり、安全運転に移行する。研究打ち切りを命じた二代目社長への方針変更は、リスクを避け安全運転に転じる日本の一般的風潮に従ったものではなかっただろうか。

中村のその後の行動は、典型的な「文化受容の『漢文方式』から『資格（英語・博士号）方

78 島山けんじ、『中村修二の反乱』、(2000), p.145.

79 Ibid., p.49.

式』への転換」であった。博士号だけは取り、最低限の研究者資格を得て、アメリカで研究を開花させる。図式でいえばA領域、B領域を拒絶し、D領域への転身である。

アメリカはこうした科学技術の研究開発だけでなく、シェイクスピア研究といった人文科学でも同様な傾向が見られる。そう指摘すれば、中村のように古典の教養を拒絶して、どうやってシェイクスピアという古典の研究が出来るのかという疑問が当然想定出来る。

例を挙げよう。

無残に父を殺されたがゆえに人間性と距離をおく、ルネッサンスとして新しいタイプの悪党がリチャード三世だという論考<sup>80</sup>がある。「ルネッサンスとして新しいタイプ」という点を見れば、まるでルネッサンスの悪党の類型を系統だって精査したような印象を与える。けれど、そもそも「無残に父を殺された」ことがトラウマになるという心理分析の対象になるような感覚がシェイクスピア時代にせよ、演劇の舞台設定された時代にせよ、あったかどうか疑わしい。そういう根本的な疑問が湧く論考に博士号が授与されることの不思議を解く鍵は次の例に隠されている。

煉獄の概念を中世からシェイクスピアまでの文学に見る論考で、肉親の死への想いも研究動機になったとはっきり書いてある論文<sup>81</sup>がある。実際に論文の作者が肉親を亡くした悲しみが、そのまま論文執筆の動機なのだ。そこから類推すれば「無残に父を殺された」トラウマを問題にする研究も、そのトラウマはリチャード三世の問題ではなく論文の作者の問題であったのではないかと疑われる。

そう見てゆくと、モンテーニュの「エッセイズ」など、ルネッサンスと『ハムレット』の思想的影響関係で、特に懐疑主義をめぐる論考<sup>82</sup>などは、ルネッサンス思想史の文脈で作品を捉えようとしたというより、モンテーニュの思想との類似がよく指摘されるハムレットの独白が論文作者の琴線に触れるところがあって、なぜそこに自分が感動したかという自己分析のために書かれた論文である推定が可能になる。

これらはアメリカが図式でいえばD領域に属することの表れではなかろうか。いわば文学研究におけるモード2ともいうべきもので、民主主義モデルに基づく研究になる。つまり、文学研究のディシプリンに貢献するのが目的ではなく、論文作者の抱えている問題解決が主眼である。しかも古典の教養があるエリートの悩み解決ではなく（エリートであれば作品の時代、思想の時代背景に敏感なので、現代の問題との区別をはっきり立てる）、普通の市民の抱える悩

---

80 Evans, Christopher W., *Determined to Prove a Villain: A Reexamination of Shakespeare's Duke of Gloucester*, (1995). MF||189||14

81 Murphy, John Lancaster, *The Idea of Purgatory in Middle English Literature*, (1995). MF||189||18

82 S. J. Doloff, *Shakespeare's "Hamlet" and renaissance skepticism*, (1995). MF||189||20

み解決が論文の形で示されている。

とはいえ、こうした論文も、古典の教養を拒絶しては書くことが出来ない。論文の執筆動機が研究対象の古典とやや遊離している点はともかく、古典とその背景の思想を探查する作業は免れない。しかし、そもそも中村の大学入試廃止論を支える古典の教養に対する反発は、古典学習そのものへの反発というより「技術官僚モデル」への反発ではなかろうか。図式でいえばA領域、B領域に属する感覚を古典学習によって強制され、D領域でこそ能力を発揮出来る、中村の挑戦的感覚を麻痺させられるので、反発したのではなかろうか。

米国シェイクスピア研究学位論文の場合は、作品自体を分析して文学研究ディシプリンに貢献するより、一般市民の問題解決の道具として文学研究を利用することに主眼を置くモード2であろうとする動きに加え、「技術官僚モデル」を壊し、その権威を支える古典の教養体系を、少なくともモード1の性格を持ったものとしては壊そうとする動きも見られる。

グノーシス派の説である「悪は肉体や世界から来る、自己とは何かを悟ることで悪や苦しみに脱する」という考え方を『ハムレット』『リチャード三世』『モルフィ公爵夫人』『フォオスタス博士』に適用する論文<sup>83</sup>がある。作品に特定の思想を適用しても（シェイクスピアや同時代の作家がグノーシス派の考えに取りつかれていたという証拠でもない限り）それだけではモード1の文学研究ディシプリンに寄与しないだけでなく、シェイクスピアと同時代の作家に疑いなく思想的背景としてあるキリスト教や人文主義の体系とはかなりずれた思想的背景を、文学研究を通じて、創作してしまうことにもつながる。

この論文の方法と小西の方法を比べてみよう。

小西は芭蕉のいう「不易流行」「風雅の誠」の解釈をめぐる、はじめ唐代の易を適用し、無理があると気づいて<sup>84</sup>宋代の易で考え、宋代の新儒学との対応関係を論じ、誠との関係を考察する<sup>85</sup>。それは「不易流行」「風雅の誠」が芭蕉自身の思想である確実な証拠（弟子の記述）があるからである。小西の場合も、そもそも小西ほどシナの思想に芭蕉とその弟子が精通していたかどうかは定かでないし、芭蕉のいう「不易流行」「風雅の誠」とはややずれた思想的背景を創作した可能性も否定出来ない。この点を強調すれば小西にもモード2的側面を指摘することになる。しかし、少なくとも芭蕉が「不易流行」「風雅の誠」という日本語を自己の中心理念としていたことは、確実に推定出来る点が、グノーシス派のシェイクスピアへの適用とは違う。実証の姿勢において、小西の研究はモード1的である。

---

83 Trotter, Jack Eugene, *Another Voyage: The Drama of Gnostic Modernity in Shakespeare, Marlowe and Webster*, (1995). MF||189||30

84 小西甚一、『日本文藝史IV』, (1986), p.376.

85 Ibid., pp.372-374.

けれど中村が嫌悪する高校や大学の教養部の「古典の先生」に「不易流行」「風雅の誠」と宋代の新儒学との対応関係を質問して、何人が的確に答えられるだろうか。小西の研究は教育と結び付いた「芭蕉の常識」を形成するモード1を掘り崩す側面がある。また個人としての「悩みカウンセリング」をシェイクスピアに求めればグノーシス派との関係が参考になるように、もし芭蕉に悩みカウンセリングを求めれば宋代の新儒学との対応関係は役に立つ。

一方シェイクスピアには、こうした思想の表明どころか、そもそもシェイクスピアの思想を伺わせる日記の類すら先述のように残されていない。「弟子」の存在なども確認されていない。そうすると、通例考えられるシェイクスピアの思想的背景であるキリスト教や人文主義の体系を、当時の教会のお説教や、同時代の作家の言葉、識者の評論などに当たって研究する努力も確実な方法とはいえなくなる。グノーシス派の思想を、シェイクスピアを中心に同時代の他の作家にも適用するには、グノーシス派の思想が当時劇作家の間で広く流行していた証拠が必要であると考えるのは、アメリカ以外では、少なくともモード1の文学研究ディシプリンとして、まず常識的な考え方であろう。

しかし確実な証拠がないまま、米国シェイクスピア研究は遠慮なくシェイクスピアの思想に迫ろうとする。まずフロイトの臨床心理学関係では、幼児が母親からミルクを与えられるときベビーベッドを蹴飛ばす代償行為を『マクベス』などに適用する<sup>86</sup>。ハムレットが近代的悩みの象徴で、そこからフロイト、ユングと続く精神分析の系譜が始まる文脈でアーサー・ミラーをマリリン・モンローとの結婚まで分析する<sup>87</sup>。登場人物を実在の人物と看做して臨床心理分析を行うものとして、完璧を求めたアンジェロが影の領域へ、おとなになることを拒絶するトロイラス、原始的魂アニマの女性ヘレナ(終わりよければ...)欠陥両親を持つ落胆(ハムレット)といった分析を並べる<sup>88</sup>。ハムレットにホレイショ、リアにケント、『アントニーとクレオパトラ』のエノババス、『コリオレイナス』のメネニウスなどの配置は主人公の臨床心理学カウンセラーだというもの<sup>89</sup>もある。

フロイトがそもそもシェイクスピア作品を参考にして編み出した臨床心理分析をもとのシェイクスピア作品に適用することが、果たして「研究」として妥当かどうかはモード1的文学研究ディシプリンとしては疑問符が付く。シェイクスピアとフロイトを、ともに臨床心理的な方

86 M. C. Favila, *Magical thinking in Shakespeare's tragedies*, (1995). MF||189||52

87 Jordan, Ryde, *Individuation and the power of evil upon the development of the personality in selected works by C. G. Jung, Arthur Miller, and William Shakespeare*, (2003). CR||291||1

88 Sally F. Porterfield, *Inner players : a Jungian reading of Shakespeare's problem plays*, (1992). 932||Sh||Po

89 Datta, Pradip Kumar, *The role of the good counselor in selected Shakespearean Tragedies*, (1991). 930.28||Sh||Dat



法での「一般市民の悩み解決」の目的に利用しようとするモード2的試みと看做すべきではなからうか。そうだとしても論証には不備が残る。何より芭蕉の「不易流行」「風雅の誠」ほどの思想表明もシェイクスピアにはないのだから、その点の確実性が決定的に不足している。

この不足を補うものがない訳ではない。まず芭蕉についていえば、高校や大学の教養部の「古典の先生」には「不易流行」「風雅の誠」と宋代の新儒学との対応関係は分からないが、私には芭蕉のすばらしさが分かるとして、生徒や学生の「悩みカウンセリング」を情熱的に引き受けるものもいるであろう。つまり、ひたすら芭蕉の作品と鑑賞者の感性を重視する方法である。鑑賞者の感性で、芭蕉の作品に取り組み、その鑑賞の延長として「不易流行」「風雅の誠」を論じる。その際「不易流行」「風雅の誠」が弟子など芭蕉周辺から確実に文献として出たものかをあまり厳密には精査せず、ましてや「不易」の「易」にこだわり、その「易」の意味をシナ文化に求め、それが唐代の儒学から来たものか宋代の儒学から来たものかを文献によって精査したりはしないやり方である。そうした場合、一見まことに偏見に満ちた不正確な見解になりそうに見える。しかし、実際はそうはならない。日本に生まれ、日本語に敏感で、詩的感性に十分に恵まれていれば、日本の伝統文化が血肉化しているのです。その的外れなことを「不易流行」「風雅の誠」についていうことはないという信念に基づく所信表明になる。しかし、それを外国人に説明するのは困難なので「外国人に芭蕉は分からない」といった言説につながる。こうした立場に近いものがシェイクスピア研究では英国にある。

英国には、上記にならっていえば、英国に生まれ、英語に敏感で、詩的感性に十分に恵まれていれば、英国の伝統文化が血肉化しているのです。その的外れなことをシェイクスピアについていうことはないという信念の下にシェイクスピア研究が積み重ねられてきた。これらを鳥瞰するアメリカの博士論文があったことは先述した。

英米でシェイクスピア関連のワークショップ的なものは数限りなくある。これが日本での芭蕉を情熱的に語る高校や大学の教養部の「古典の先生」がある程度「悩みカウンセリング」の役割を果たすとすれば、それに対応するものになる。

（それ自体はエリート主義的モード1の知識授与であっても）これぞまさに「悩み解決」という「問題解決」モード2の科学技術社会論的な考え方ではなからうか。このように立場や見方によってモード1とモード2は互いに入れ替わる面も持っている。